メメント・モリ

Ｒｅｃｏｒｄｅｒ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メメント・モリ

【Ｎコード】
Ｎ１１８４Ｖ

【作者名】
Ｒｅｃｏｒｄｅｒ

【あらすじ】
十一年前の事故は時とともに忘れられ、日常はなんの変りもなく回り続ける。事故の被害者である零番街の住人達もようやく自身の生活を確立し、双方緩やかに時の中を歩んでいた。
しかし歯車は休まない。平和の中に眠る少年たちを、世界は再びたたき起す。
そしてまた、一つの歯車が動き出す。

1　プロローグ（前書き）

設定は現代となっています。気をつけるようにしてはいますが、誤字脱字、その他文中で発見したおかしいと思われる物は指摘していただけるとありがたいです。

1　プロローグ

その日。二人の被験者の心臓停止と共に、その地域の平穏は終わりを迎え、一つの歯車が動き始める。

十一年後

「おい、爺さん。怪我したくねえんだったら、素直になることだぜ？」

金属製のバットを肩に乗せ、老人の横に一人の青年がしゃがみこんだ。その華やかな髪の色を披露しつつ、些か安っぽい脅しを口にする。横に目を向ければ彼以外にも二人、花束のような頭の青年が肩にバットを乗せ、窓から外を眺めている。

空はどんよりと灰色の雲に覆われ、大粒の雨が地上で跳ね踊りながら断続的に音を響かせている。

先ほどの脅し文句も、屋根で鳴る雨音と同様だと言わんばかりに、老人が鉄塊に鎚を振り下ろすリズムが狂うことはない。老齢を示す髪の白さも、顔の皺も、その筋骨隆々とした体躯の前に、弱々しいという印象を失っている。鋭い眼光が赤熱した鉄塊を押さえつけ、鎚を振り下ろす。幾度目かその独特の響きを聞いたとき、散った火花が傍にしゃがんでいる青年に振りかかった。

「あっちぃ！　何しやがんだこのクソ爺ィ！　何とか言いやがれ！」

「おめえらの欲しがるようなもんは、ここにゃねえ。とっとと失せな」

彼らを恐れるでもなく、相変わらず鎚を振り下ろす老人の言動が、青年の苛立ちを煽る。外の景色を眺めていた二人が、その会話に顔を見合わせた。

「へっ！　俺が言ってるのはちんけな包丁なんぞじゃねえ。俺たちの用があんのは人――」
「知らん。出ていけ」

取りつく島もなく老人は言い放ち、再び眼前の鉄を叩くことに集中する。もとより我慢をあまり知らぬ青年の目が、怒りに細まった。

「じゃあ、てめえの体に聞いてやろうかぁ！」

使い古された台詞を吐きつつ老人の肩に狙いを定め、担いでいたバットを振りあげる。青年に向けられた老人の眼が、一瞬鋭い光を帯びた。

その時、突然雨音が今までになくはっきりと部屋に響いた。遠慮の感じられぬ音を立ててドアが閉められ、続いて湿った足音が響く。

入ってきたのはびしょぬれの少年、いや青年と言うべきなのか。そのちょうど中間に位置するであろう彼は、顔にまとわりつく髪の毛を払いながら部屋の中を見回した。

上下黒の服装に、典型的な日本人の色素。右目に黒の眼帯をはめ、その上から眼鏡をかけるといった、やや奇妙な出で立ちに、その場の空気が固まった。

「なんだ、宿屋じゃないのか……。こんなガラの悪い連中を入れてやるのが他にあるとはな」

そんな内容を隠そうともせずに呟き、玄翁（げんのう）を手に、興味深げにこちらを眺める老人に歩み寄る。

「ご老体、初対面で頼みごとをするのはまことに心苦しいのですが、一晩泊めていただけないでしょうか？　この雨で野宿というのは不

都合でして」
「おい、てめえ！　何のつもりだ！？」

それまで茫然としていた青年が我に返り、自分たちを完全に無視した少年に怒りの矛先を向けた。
振りかえった少年は先ほどまでの慇懃な態度とは打って変わり、剃刀のような視線を青年へ向けた。三人青年それぞれに目を向け、鼻を鳴らす。

「誰だ？　この町で俺が顔を知らないのは、ここに移住した物好きか、この地域にあまり警察関係の人間が寄り付かないと聞いた、犯罪を犯して逃げてる屑かだ。あんたらはどうやら、『屑』のようだが」

青年の顔が信号が色を変えるように、色を変えた。先ほどから苛立ちを募らせ、さらに「屑」と形容されて黙っているほど、その青年は我慢強くはなかった。顔を怒りに紅潮させ、手にした得物を振り上げる。しかし、その手が振り下ろされる前に、彼の肘にそっと手が添えられた。

「何かを振る時はできるだけ動きを小さく。そうしないと関節部分を押えられ、簡単に止められる。また――」

そこでいったん言葉を区切り、少年は青年の鳩尾へその左拳を沈めた。反射的に身を屈めた青年に対し、少年はさらに続ける。

「手が空いているなら急所は確実に守ること。止めは喉仏へ」

肘を押えていた手を離し、解説通りに青年の首に拳を叩きつけた。絞め殺された鶏のようなうめき声を立て、青年は殴られた部分を押

え前のめりに倒れた。
少年に対し少なからず恐怖心を抱いたのか、残りの二人はバットを構えたまま、顔を見合わせている。
「そこに転がっている彼を拾って帰ってほしいのですが……お願いできますか？」
再び礼儀正しい態度に戻った彼の口調こそ丁寧だが、その視線は未だ剃刀の切れ味を備え、青年二人を威圧している。二人の青年はじりじりと床の上で気絶している仲間に近寄り、その手を掴むと、必死に仲間を引きずりながら屋外へと走り出した。先ほどよりも強くなったのでは、と錯覚するほどに勢いよく降りしきる雨の中を走り去る。
少年は開け放たれたドアに近づき、何事もなかったように閉めなおした。
「名は？」
雨音が再び締め出され、澄んだ音だけが室内に響く中、老人が唐突にその無愛想な口を開いた。その答えを待つことなく、再びその手が動き始める。鎚が上下するたび、床に火花が飛び散り、鎚が音を響かせる。繰り返されるリズムの中、少年が口を開いた。
「シュン、と覚えていただければ結構です」
そこでいったん言葉を区切り、自身に向けられた視線を見返す。柔らかく微笑んだその顔に一瞬困ったような表情が浮かんだ。
「ただ、シュンとね」

再びリズムを奏で始めた鉄塊が、外の雨音と重なった。
その日、歯車が一つ、あるべき場所に収まり、回り始めた。

1　プロローグ（後書き）

ようやくと言うか、何と言うか新作です。読んでくださる方々を楽しませられるよう、精進していきますので、よろしくお願いします。

2　日常

「少し出てきます。明日には戻る予定ですので、ご心配なく」

シュンはそれだけ告げ、ドアを押しあけた。注がれた朝日が、東の間室内を黄金色に染め上げる。初対面の時とは違い、紺青のワイシャツに、卵色のズボンといった普通の服を身にまとい、身軽に敷居を越えていく。その背中を見送り、鉄二は赤く熱せられた鉄に玄翁（げんのう）を振り下ろした。

彼、シュンがこの鍛冶屋へ腰を落ち着けて今日で一カ月。一晩の約束が、そのまま三十の晩を過ぎた。しかし、鉄二に彼を追い出そうという気は起きていない。と言うよりも、引き留めている感がある。自身の食いぶちをしっかりと稼いでくる上、鉄二が鉄を打っている間に家事もこなすという働きぶりでは、そんな感情が起きるはずもない。この地域の特殊な環境で育ったとはいえ、些か出来過ぎている感がある。

約十一年前に起こった事故。冷戦中にこの地に建設された研究施設を中心に、その周囲四百mあまりの人間が、五歳以下の子供だけを残し、消えうせた。調査の甲斐なく、原因も、どのような現象であったかも、何も特定されなかった。

孤児となった生存者は、国の作った幾つかの施設に入れられた。しかし人口密集地であったためにその数は多く、施設の維持費は、不景気の政府がいつまでも許容できる金額ではなかった。施設の完成から七年後、「無駄」削減の名のもとに施設は民営化。元より国の支援で成り立っていた施設は多くが瞬く間に経営破たんの運命を辿った。何とか対策を講じた施設も貧窮は免れず、施設内の子供が働きに出ることで、何とか施設を維持できる有様だった。

結果、路上は行き場を失った子供たちであふれるはずだった。しかし、彼らは新たに家を見つけることに成功する。

事件発生後、実態不明の物質が付着しているとして、立ち入りを禁止されていた地域。つまり、今彼らがいるここ「零番街」と呼称されるこの地区に、彼らは舞い戻った。

つい最近、マウスを使った実験により危険性のない物質であると確認されたが、その謎の物質の存在は人々を怯えさせ、あえてその地に移り住もうという物好きな人々は、そうはいなかった。

そのため、後に残った家々は空き家となり、孤児たちにしてみればそれは天からの恵みに等しかった。国側は彼らを追い出そうとしたが、彼らも家を失うまいと必死で抵抗し、警察官が追い出そうとして返り討ちにあう始末。加えて追い出した数日後には戻ってくる、彼らの受け入れ先が他にはないなどの理由から、現在では放置されている。

最近では治安が落ち着いたとはいえ、このような場所に移住する物好きはまずいない。そう自分を皮肉りつつ、鍛冶屋は止まっていた手を再び動かし始めた。シュンの行き先に思いを馳せながらも、その手の動きが止むことはなかった。

▼

「おい、まだ生きてるか？」

シュンが投げかけた言葉に、横になった少年一人がゆっくりと寝返りをうった。シュンの問いかけに弱々しく腕を上げ、応える。

シュンが訪れた家の中、廊下を進んだ奥の和室にいるのは三人。二人は横になり、一人がその横に座っている。彼の記憶では五人が住んでいたはずだが、どこかに働きに行っているのだろうか。

「いやー、まさか二人同時にぶっ倒れるとは思わなかった」

少年が一人こちらに首をひねり、苦笑いしながら肩をすくめた。

「残りはどこいってんだ？　さすがに、そいつらだけ残すわけにはいかねえだろ？」

そんな会話を交わしながらシュンは壊れたドアをくぐり、玄関に靴を脱ぐ。脱いだ後にきちんと靴を揃え、床を軋ませながら部屋へと向かう。

けばだった畳の上に腰を下ろすと、ポケットから紙袋を取り出した。

「ほれ、抗生物質。それと、一応腹こわした時のための整腸剤な」
「おお、すまん。保険証ないとクソみてえに高いからな」
「まあ、仕方ないさ。それより――」
「ああ、分かってるよ。今日の午後はシフトを空けといたから、じきに帰ってくると思う」

その言葉にシュンは入り口を見やるが、未だ人影は見えない。入り口には壊れたドアがぶら下がっているだけだ。

「そういや、なんでドアが壊れてる？　前来た時には何ともなかったろ？」

シュンの問いかけに、彼は溜息をついた。
三週間ほど前、強盗まがいの青年が三人押し入り、破壊してしまったらしい。
三人という言葉に、シュンの脳裏に一か月前の三人組が浮き上がった。まだいたのか、と溜息を吐きつつ、被害を尋ねる。

「ドアだけ。そいつらは三丁目の交番の前に放り出しておいた」
「ただいまー」

少年が笑顔で自慢げに報告を終えたのと同時に、残りの二人が帰宅した。両手にぶら下げた袋から、賞味期限の切れた弁当を取り出し、床に並べる。病人二人も寝床から起きだし、適当な弁当を選ぶとふたを開け、箸を手に取る。シュンのために少量のおかずを蓋へとりわけ、差し出すことも忘れない。

しばらく全員が黙々と箸を動かす。

ふと、一人が顔を上げ、シュンの方へ視線をよこす。

「そういや、お前まだホームレスなのか？」

「やかましい。家はあるんだよ」

「あれは家じゃねえだろ」

現在、シュンの住んでいる家は一月前のような雨の際にはスプリンクラーが作動することになる。住みよい家は既に全て居住者がいるため、必要に応じて非難することで凌いでいる。

「だから俺たちと住めば――」

「バーカ支援するほうがされてどうすんだよ。大体、今はちゃんとした家があるしな。条件付きだが。御馳走様、っと」

「だからって何も俺らから返せねえじゃんかよ」

「別にお前らを特別扱いしてるわけじゃねえよ。大体――」

シュンは食事の残骸をゴミ袋に放り込み、よっこらしょ、とばかりに立ち上がる。さらに少年達にも立ち上がるよう促し、伸びを一つ。

「俺もこれで儲けてるしな。ほら、行こうぜ。高給バイトに」

▼

電車に揺られながら幾つかの駅を過ぎ、たどり着いた場所は銀座。立ち並ぶビルの森を進み、一軒のビルから地下へ続く階段に足をつける。

軽やかな足取りと共にたどり着いた場所はバーと思しき扉の前。シュンは横に見えるインターホンに指を伸ばし、軽く押し込む。マイク越しに会話を交わしていると、唐突に声が途切れた。もう一度シュンが手を伸ばした直後、何の前触れもなしにすさまじい勢いで扉が外側に開かれ、鈍い音が響く。

「もう、遅い！　来ないかと思ったじゃない。あら、どうしたの？」

一人の女性が顔を見せ、言いたいことを早口にまくしたてる。目の前のシュンに気づいた。

風を切って開けられた扉にしたたか殴られた額を押え、シュン何か言いたげに目元をひくつかせたが、結局何も言わずに二人の小年を引き連れ店内に足を踏み入れた。

店内は小さいながらも落ち着いた、雰囲気の良い装飾を施してある。やや抑えられた照明が控えめに店内を照らし、周囲の景色に落ち着いた調和を生み出していた。正面には舞台らしきものも窺えるが、現在はカーテンで覆われている。

それまでシュンを先導していた女性が店の奥に消え、それとほぼ入れ替わるタイミングで、右目に泣き黒子のあるハンサムな男性が顔を見せた。

「開店まで時間がない。用意はできているかい？　それと、その二人が連絡にあった君の知り合いでいいんだね？」

「ええ、バイト要員です」

やや早口ながらも、シュンから二人の紹介を受けて微笑み、男性は二人に向き直り、改めてあいさつを交わした。

「ようこそ。マジック・バー『オリーブ』へ」

＊

「大丈夫か？」

シュンの問いかけに答える気力すらなく、重い足を引きずりながら何とか家の中までたどり着いた様子は、さながらゾンビと言ったところか。

現在午前二時。バイトと称した強制労働に、彼らの足は棒と化し、腕も鉛を流し込みでもしたように重量を増していた。

奥の部屋まで体を引きずり、そのまま敷かれていた布団に倒れ込む。布団の下から悲鳴が上がり、病人が体を引きずりだした。

「んだよ、畜生！」

「勘弁してやれ。ほとんどぶっ続けで働いてたんだ」

悪態をついた少年に、その二人に比べ余裕のあるシュンが代わって弁解する。

約十時間。トイレ以外は常に注文を取り、運び、食器を回収する。これらの作業を続け、さらに最終電車を過ぎたために徒歩での帰宅を余儀なくされれば、この疲労も納得がいく。

倒れている二人をしり目に、シュンは懐から茶封筒を取り出した。それなりの厚さを持ったそれの口を開け、中身を取り出す。慣れた手つきで枚数を数えながら三等分し、内二山を前に押しやる。

「ほれ、お前らの取り分だ。六万ある。つか、なんで全部五千円札

なんだよ……」

文句を言いつつ自分の取り分を懐へしまい、立ち上がったシュンを、今まで倒れていた少年が引きとめた。

「その配分、おかしいだろ。絶対七割以上はお前の稼ぎだって」

上体を起こし、シュンに向き直る。その視線をシュンが受け止めた。

彼らが仕事をしている間、シュンは舞台の上でマジックを披露し、終始客を湧かせていた。彼の稼ぎ分が多いことは火を見るよりも明らかだった。そんな馬鹿正直な証言に、シュンは肩をすくめる。

「俺の目的はお前らの支援だ。俺よりもそっちのが大所帯だしな。それに、同じ封筒に全部まとめて入れてあるんだ。分け前は同じってことだろ」

彼が要請した支払い方法であることは棚上げにし、外の空気を吸ってくると、部屋を後にする。

ひんやりとした夜気が体を包み、心地よく肌を撫でる。しかし、そんな心地よさとは裏腹に、シュンの周囲の温度は鳥肌が立つほどに低下していた。

「何の用だ?」

壊れたドアを抜け、数歩。足をとめたシュンはともなく問いかける。それまでののんびりとした声音はどこへ消し飛んだものか。シュンが発した声には、剃刀の刃を上回る鋭利さが感じ取れる。その刃を鈍らせるような、やんわりとした口調が、その言葉を受け止めた。

「そんなに怒らないで下さいよ。私は何も――」
「何の用だ？　俺はあんたとは手を切ったはずだが」
シュンの視線が右に向けられ、その瞳に一人の男が映った。全身を黒いスーツで包み、同色の帽子を目深にかぶり顔を隠すそのたたずまいは、夜の闇に溶けているかのような錯覚を覚えさせた。
何の飾り気もなしに、再度投げかけられた拒絶に、相手は大げさに溜息をつく。
「あれ、そうでしたっけ？」
飄々とした口調で発せられた言葉に、シュンの眉根がほとんど分からぬほどわずかにひそめられる。
「俺はもう裏方を演じる気はない。それはあんたも知っているはずだ」
シュンは一方的にそれだけ告げ、踵を返す。しかし、その背中に投げかけられた言葉が、彼の一歩を妨げた。
「ええ。でも、今回はあなたも進んで受けてくれると思いますよ。零番街（ここ）に関するものですからね」
男がそう言った直後、紙を捲る音が聞こえ、音が止むと同時に再び声が響き始める。
「零番街を標的に定めたグループが確認されました」
一気に吐き出された彼の言葉が、シュンの眉間に皺をよせ、依頼

の仲介者の話に意識を向けさせる。最近、見かけない連中を目にした、という話を各グループから耳にしているだけに、まんざら嘘と断定することも出来ない。きな臭い空気が漂い始めた。

「しかも、プロの集団のようです。当然あなたと同業のね」

さらに続けられたその言葉に、シュンは眉間の皺を一層深くし、顎に手を添える。

『プロ』の集団。この言葉を聞くことになるとはさすがの彼も予想していなかった。一口にプロといっても、実は二種類ある。一つはいわゆるプロ。それを生業としている者のことを指す。もう一つはセミプロで兼業として、小遣い稼ぎなどを目的とした擬似プロ。しかし、集団となれば、まず間違いなく前者である。目的を確定できずとも、思い浮かぶことがらはマイナスのものしかない。

自分がやればその組織の戦力を削ることも可能だ。後は知り合いに任せて処分すればいい。しかし、そうなれば再び人を殺すことになる。それは、妥協できるものではなかった。

シュンの考えを見透かしたかのように、男はやや間をおいて話を続ける。

「まあ、依頼と言っても今回は標的一人の無力化、なんですがね。相手もなかなか慎重なようで、組織に脅しをかけるだけで、相手を殺す必要はありませんよ」

集団の一人を倒せば相手方に喧嘩を仕掛けることになる。しかし、慎重な相手ならばその慎重さ故に、出鼻を挫くことで作戦の開始を遅らせられる、うまくいけば白紙に戻す可能性もある。

その言葉にも迷いを見せるシュンに対し、男は畳みかけるように言葉をつづけた。

「断るなら、それもいいでしょう。頼める人はほかにもいますから。代わりはいます」

それまでの迷いが嘘であったかのように、シュンが鋭く右の闇を睨みつける。シュンの視線の先からからかうような悲鳴が上がり、声が続く。

「そんなに睨まないで下さいよ。別に嫌がらせではないんですから。それに、あなたが受けるのならば、あとはサポートに二人ほどですかね。」

「……」

シュンが零番街での支援を行っているのは、ひとえにこの男からの依頼を不要にするため。零番街は現在自立に向かっており、この男の必要性は低下している。しかし、今回のように、働き手が減った場合の対処はまだ甘いところがある。再度この男が付け入れる状況を作ってしまえば、この男を頼る連中が現れてもおかしくはない。それだけは避けたかった。自分以外の誰かが参加することは避けたいが、詳細な情報がない以上、その程度の加勢は必要だろう。

目を閉じ、思案していたシュンがゆっくりと目を開けた。暗闇に向けて、手のひらを上にして右手を差し出す。その上に、軽い音を立てて五枚ほどの紙が置かれた。

「では、お願いしますね。こちらの掴んでいる情報はすべて載せてあります。ではまた」

気配が消え、闇が再び静寂を取り戻す。手のひらに乗った書類に目を向け、それを懐に押し込むと、シュンは再び光の中へ足を踏み入れた。

「病人もいるんだ、そろそろ寝よう。俺も今日は泊ってくわ」
「オッケー、じゃあ、布団敷こうぜ」

部屋の床に布団を敷きつめ、各々適当な位置に身を横たえる。シュンが立ち上がり、天井からぶら下がっている紐に手をかける。
鉄二のような物好きのおかげで、かろうじて通っている電気を消し、再度体を横たえる。頼める人は他にもいますから――夜の中から届いたその言葉が脳裏をよぎり、眠りに落ちかけているシュンの脳裏に、微かにさざ波を立てた。

2　日常（後書き）

一応、一週間に一度の更新を目指しています。ある程度の書きためはあるので、五話目くらいまでは予定通り更新できると思います。

……始まったばかりだとあとがきに書くことがないな。

3　回帰

午前五時三十分。本来なら空が白み始める時間だが、雲に覆われた空は灰色に濁り、夜明けの到着を先延ばしにしていた。人影もなく、深い静寂に包まれている銀座の街を、一つの足音がやや早足に通り過ぎていく。

こちらを押しつぶそうとしているかのように立ち並ぶビル群を見上げ、大量に突き出た看板を眺める。『オリーブ』と書かれた看板も、今日はまた違って見えた。その見なれた看板から目を引き離し、シュンは地下へと足を踏み入れた。

インターホンを押しこみ、向こうから聞こえる声を無視して無言で待つ。ドアが向こう側からノックされ、シュンはそれを三、三、二と区切ったノックで返す。

ドアがゆっくりと開けられ、目の前に昨日顔を合わせたばかりの女性の顔が現れた。

「あら、珍しいわね。足を洗ったんじゃないの？」

「そう上手くはいかないようでね」

女性の問いに曖昧な答えを返し、店内に足を踏み入れる。

見なれたその店内の様子も、明かりが消えているだけでなんとも不気味に見える。テーブルをよけながら歩を進め、「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた扉を押しあける。その内部は、普通と呼ぶにはやや不自然な場所だった。

床には大量のコードが絡み合い、毛糸玉のような様相を呈している。中央に置かれた画面とキーボードを圧迫するように、巨大なサーバーが両脇にそびえている。

足の置き場所に困るほどに密集したコードをよけつつ部屋の内部に体を押し込み、続いて入ってきた女性に書類を渡す。

女性は興味深そうに紙を捲り、簡単に目を通して行く。最後のページでその手を止め、紙面でこちらを睨む強面の坊主頭に目を留める。

「そいつについて出来るだけ情報が欲しい。今日の午後六時までに」

「了解。兄さん！　仕事よ！」

ドアの外に向かって声を張り上げると、瞬く暇もなくハンサムな顔が視界に入りこんだ。

シュンを見て微笑むと、女性の持っている書類に目を落とし、頷く。

「じゃあ、姉さんにはネットサーフィンをお願いしようかな。僕は散歩に行って来るよ」

二人が互いにおかしな呼称をしていることに気にとめた風もなく、シュンはひとまず寝かせてもらう、という言葉と共に店のソファの上に身を投げる。扉の開閉音とサーバーの稼働音を耳に残し、シュンは眠りに落ちた。

＊

安らかな眠りを楽しみ、ゆらゆらとたゆたう夢の中に身を浮かべる。その安楽な夢の中で、彼の意識の底深くに沈んでいたい記憶が、ゆっくり囁いた。

「シュン君？」

懐かしい声を聞いたように思ってゆっくりと瞼を押し開けると、ワインレッドの天井が目に映った。寝起きの思考回路にかかった霞

をゆっくりと振りはらい、腕の時計に目を向ける。
午後五時。依頼の時間より些か早いものの、彼らにとっては十分な時間が経過したと判断する。昨晩の睡眠不足も解消し、やや勢いをつけて上体を起こす。軋むスプリングの音を後に残し、「関係者以外立ち入り禁止」の表示を押しのけ、低いうなりを発する部屋に足を踏み入れる。
振りかえった女性が首の動きで近くに寄れと合図を出し、収穫があった事を示した。足元のコードを避けながら画面に近付き、こちらを睨みつける無愛想なタコ頭に顔を寄せる。

「ダニー・ミリガン。元アメリカ陸軍所属。軍隊格闘やナイフ術の腕は突出していて、所属していた基地では彼に勝てる兵士はいなかったようね。射撃の腕はまあまあといったところだけど。二年前に除隊してからの記録は全くなし。つまり、クレジットカードや携帯電話の新規登録、パスポートの作成その他、記録に残りそうなことは一切行っていないわけ」

除隊理由の詳細も書かれていない。軍隊でこれだけあっさり除隊するのは妙だ。民間の軍事会社にヘッドハンティングされたとしても、その後記録がないというのはやはりおかしい。無機質な情報の羅列にシュンが一通り目を通したところで、入り口の扉が開閉する。遠慮がちに閉められた扉から足音が続き、ドアノブがひねられる。ドアを押しあけた男性が、手にした書類をシュンに差し出す。
差し出された書類を手に取り、パラパラと流す。一人の人物に関するデータにしては量が多いようだ。その思考を読んだように、男性が口を開いた。

「その男は除隊後、ヘッドハンティングされたみたいだね。現在はボーン・フィッシャーという名前だ。その男の関わったとされる事件と、雇った組織についても少し載せておいたよ」

紙面に目を通すと、それが新聞記事の切り抜きであることが分かる。その事件に対する見解、及び殺害状況などの詳細な情報書かれている。シュンは満足げに目を細めると、視線を上げた。

「御苦労さま」

男性に厚い封筒を手渡し、足早に部屋を出る。

シュンが店を出た事を確認し、男性が封筒の口を開ける。中身を確認し、男性が微笑んだ。

「姉さんの手口が使われてるみたいだね」

笑いながら封筒から中身を取り出した兄が、姉の前で札束を振って見せた。千円札のみで構成された、五万円。兄の振る札束を眺めながら、これが自業自得かと独りごち、姉は手元に戻った金額に苦笑した。

＊

午後六時半。鍛冶屋の扉が音を立てて開いた。蒸し暑い室内に外部の新鮮な空気が流れ込み、束の間の快適さをつくりだす。入り口に目を向けた鉄二はシュンの姿を目にとめながらも、一定のリズムを刻み続ける。シュンは特に挨拶することなく鉄二の横を通り過ぎ、奥へと消えた。その挙動に、鉄二の腕が、動きを止めた。

シュンは使われずに放置されている部屋の中でも、最も奥の部屋の前で立ち止まった。そのドアを壁に叩きつけるように開き、足を踏み入れる。シュンはその部屋にただ一つある木箱の前で、壁にぶつかったように立ち止まった。木の蓋を跳ね上げた一瞬、過去へと思いを馳せ、そこに眠る彼の分身に目覚めを促す。

八本のナイフが取りつけられたベルトを腰に巻きつけ、懐かしい重さを伝える二挺の黒く巨大な拳銃を脇の下に吊ったホルスターに放り込む。大きく裾をなびかせつつ、着古したロングコートに袖が通され、彼らの重みが、奥底で眠りについていた感覚を呼び戻す。さらに木箱に残された最後の形見を掴み、持ち上げる瞬前。コートの裾が翻り、抜き放たれた拳銃が戸口の人影に向けられたのは、戸口の床が軋みを上げるよりも早かった。戸口に佇む人物を確認し、シュンは銃口を下ろす。

銃口を向けられたにもかかわらず、鉄二は驚いた風もなく、ゆっくりとシュンに歩み寄った。

「失礼しました。どうやら、昔の感覚に戻ったようでして。まあ昔と言っても、たかだか二年前ですが」

きまり悪そうな笑みを見せる彼は、今まで鉄二が見てきたシュンとなんら相違はないように思われる。しかし、その内面はもはや『シュン』というそれまでの名で呼ぶことすら憚られるほどに、変質していた。

「めかしこんで、どっかに行くのか？」

「ええ。もしかすると、あなたの跡継ぎはいなくなるかもしれません」

シュンが銃口を向けた事を咎めるでもなく、疑念を抱くわけでもない。鉄二の言葉は今まで通りの日常の色に染まった、平穏な内容を問いかけた。その言葉に返答するシュンの口調もまた、内容とは裏腹に、まるで明日の天気を占うが如く、日常の色が染め抜かれていた。

時の流れが停滞し、また動き始めるまでの数瞬。真っ向からシュンに向けられた視線が、シュンの背を押した

「では、また明日」

軽い挨拶を残し、シュンは部屋に背を向ける。ゆっくりと歩み去るその背中は、後ろ髪を引かれながら友人に別れを告げ、家路につく子供たちの背が見せるものと、同質の感情を漂わせていた。

＊

先ほどまでは微かに感じるだけだった磯の香りが、今でははっきりとその存在を主張している。打ち寄せる波の音が微かに流れ、沈黙を通そうとする夜空に、ささやかな抵抗を見せていた。そこかしこに積まれたコンテナが巨大な迷路を作り、コンテナの影と月明かりに色分けされたアスファルトの地面が、囚人服のような模様を描いていた。

足早に、しかし無音で歩いていたシュンが、コンテナの影で足を止めた。コンテナを出たところに二人分の気配が漂っている。耳を澄ませば、波の音に混じって小声で話す声も、微かに風に乗って流れてくる。作業員か。それにしては波の音にまぎれるほどの小声で話すのは釈然としない。情報では敵戦力は一人だけのはずだが、状況は常に変化するものだと、彼は経験から理解していた。数秒思案し、視線を上げると、三つ積み重ねられたコンテナが目に映った。周囲を見回し、音を立てないよう慎重にコンテナの僅かな出っ張りに指をかけ、体を引き上げる。静かにコンテナの上に体を転がし、そのまま体を前へ引きずると、徐々に会話の内容が耳に届く。

「――にこんなところで待っててていいのかよ？　いくらシュンが見つけやすいって言ったって、そりゃ敵にも見つかりやすいってことだろ。つーか、本当に来んのか？」

「来るさ。シュンは秒単位で時間に正確だ。時間まで後十二秒ある」

会話の内容を聞いたシュンは細く息を吐きだした。気配を隠すことを止め、コンテナから飛び降りる。全身で衝撃を吸収し、音を立てずに二人の前に着地する。
下の二人は頭上から舞い降りた物体に対し、瞬間構えを取ったが、それがシュンであることに気づくと、肩の力を抜いた。
一人は美青年、もしくは美少年と呼称される類の整った顔立ち、もう一人は頬にある大きな傷が特徴的な少年。いずれもシュンよりは若干歳下に見える。

「随分と無防備だな。警戒ぐらいしておけよ」
「お前の登場がいきなり過ぎるんだ。なあ、リョウ」

リョウと呼ばれた少年が腕を組み、激しく頷く。奇襲はいきなりに決まってるだろう、その言葉をひとまず呑み込み、シュンは深く溜息をついた。
その間に少年――リョウが懐から取り出した地図を広げた。周囲には幾つかの倉庫らしき建物が記され、現在位置と思われる場所に印がつけられている。その地図を眺めていたシュンの眉間に皺がより、目が疑い深げに細められる。リョウも後頭部で腕を組み、眉間にしわを寄せている。

「やっぱ、不自然だよな」
「確かにな」

彼らが一様に感じていた違和感とは、その場所。今回は全員が『零番街の危険排除』の名目のもと、依頼を受けた。しかしこの場所はと言えば、港。零番街からは遠い。相手の目的が偵察であれば、零番街の付近にいるはず。加えて、このような場所にいるのは何故か、という疑問も残る。まさか散歩のために夜な夜な、無人のコン

テナ置き場をうろつくとも考えにくい。倉庫街は二か所に分かれており、戦力を分断して探索に当たる必要があった。

「罠、か」

そうなれば、導き出される答えは自然と少数に絞られる。依頼主が裏切った可能性もある。しかし、零番街が標的とされている可能性は否定しきれない。となれば最低限、敵戦力の把握だけは必要となる。

「当たって砕け散ろうぜ！」
「ひとまず散開する。それらしき人物を発見次第、可能なら攻撃、殲滅。無理がある、または罠だと判断した場合は無線で連絡。いいな？　無線の周波数は――」

リョウの発したふざけた行動計画を叩き斬り、シュンが作戦をまとめる。二人が頷いたことを確認し、シュンとリョウは西側。もう一人が東側の探索を行う。三人は無線の周波数を調整すると、手で別れの合図を送り、それぞれの方角へ姿を消した。

3　回帰（後書き）

まだまだ序章です。
最近うちのあたりは過ごしやすい気候で助かってますが、各地はやはり暑いみたいですね。お体に気をつけて。
そう言えば、新人の方は良く『感想お願いします』のようなことを書いていますが、やっぱり他の人に感想を書きまくるのが近道な気がしますね。相互評価的な感じで。これを読んでいる中に感想を渇望してる方がいましたら、お気に入りの作品や目に付いた作品に感想を書いてみることをお勧めします。

4　復帰

「そっちはどうだ、リョウ？」
「ハズレ。レンの手伝いに行った方がいいみたいだなぁ」

溜息をつくようなリョウの返答に対し、シュンもまた息を吐く。集合場所を指定し、身をひるがえすと、足元で光る物が目に映り、拾い上げる。

二本の釣り針がテグスに絡まり、捨てられたものらしい。シュンは捨てようと投げかけた手を止め、何故か懐に押し込んだ。倉庫から足を踏み出し、薄い雲に覆われた空を見上げる。杞憂だったのかもしれない、そんな願望にも似た考えを抱きつつ、シュンは集合場所へ向かう足を速めた。

倉庫の間を抜け、コンテナ置き場へ足を踏み入れようと進めていた歩が止まる。腰に下げた無線機の明かりが明滅し、通信を知らせていた。切り替えスイッチを押し、送信した相手へと問いかける。スイッチから指を離した途端、レンの焦燥に縁取られた声が響いた。

「救援を！　E―十三倉庫だ！」
「敵は？　状況を」
「敵は一人。だがこいつ……クソ！」

銃声が無線機を通して響き、それを最後に無線機は沈黙した。

シュンは落ち着いた動作で無線を腰に収め、それと同時に強く地を蹴った。身に付けた大量の武器が耳障りな音を立て、耳元で風が唸る。リョウとの合流地点と定めた位置を通り過ぎ、コンテナ置き場を通り抜ける。横を向けば、同じく風を切りつつ疾走するリョウの姿が目に映った。互いに頷き、立ち並ぶ倉庫の間を駆け抜ける。B、C、Dの倉庫群を通過すると、E―十三倉庫が確認できた。

地面を抉らんばかりの勢いで停止したリョウは額に浮かんだ汗を拭い、大きく息を吸い込む。呼吸を整え、シュンに向けられた視線がいたわるように細められた。

「大丈夫か？　進歩しねえなあ」

シュンは軽く手を上げ、親指を下に向ける。軽い動作とは裏腹に彼は大きく肩を上下させ、直立することもままならないほどに疲弊していた。無理に姿勢を戻し、呼吸を乱したまま入り口を指差す。

それぞれ入り口の左右に立ち、シュンがドアを押し開けると同時に、内部を確認したリョウが飛び込む。二秒ほどの間をおいてシュンも倉庫へ足を踏み入れ、柱の陰に立ち止まっているリョウに合流する。

倉庫内は広く、二階部分には細い廊下が見える。搬出直後なのか、荷物はあまり置かれていない。その中に一つ、箱とは違うカタチが落ちていた。柱の影から踏み出そうとしたリョウの肩に、シュンが手を置く。首を横に振り、自身が足を踏み出す構えを見せる。

柱の影を飛び出した瞬間、銃弾がその後を追い、コンクリートの床にミシンで縫ったかのような穴をうがった。穴のあいたコートが着弾の衝撃で広がり、地面に張り付く。

銃撃の方向から、リョウが二階へと手榴弾を投げ込み、耳を塞いだ。爆発音が響き、飛び散った破片が天井や壁で跳ねかえる音が続く。

耳を塞いでいた手を離し、階上の音に耳を澄ませる。二階で動きがない事を確認し、シュンが柱の陰から足を踏み出した。

一歩を踏み出した直後、心臓が握りしめられるような不吉な予感に軋み、背後に跳ぶ。同時に、彼の立っていた床が砕け散った。

「頑丈なやつだな」

床の破片を弾きながら発せられたリョウの軽口を聞き流し、二階への階段に巡らせていた視線を留めた。
階段に近寄り、リョウに合図を送る。リョウが二階へピンを引きぬいた手榴弾を再度投げ込み、同時にシュンが床を蹴る。破裂音と共に、二階部分が煙に包まれ、視界に白いカーテンを引いた。煙の中を足音を立てずに駆け抜け、その中に人影を確認する。煙を払うような動作を続ける人影の後頭部に、落ち着いた動作で鉄の筒を突きつける。

「両手を挙げろ、ゆっくりだ」

言語が通じないのか、反応のない相手にもう一度、今度は英語で繰り返す。持っていた銃を落とし、男の手がゆっくりと頭上に伸ばされ、何も持っていないと示すように腕を捻って見せる。
頭二つ近く大きな男の頭に銃を突き付けたまま階段を下り、リョウの出迎えを受ける。そのまま背を向けて帰ろうとしたリョウをシュンが呼び止めた。

「リョウ、こいつのボディチェックを頼む。帰る途中で爆発しても困るからな」

ひとまず依頼を完了させ、ほっと息をつく。帰ったらひとまず風呂に、と幸福に膨らんでいたリョウの夢想は、膨らませた風船のごとくあっけなく破裂した。
近づくリョウが腹の前で腕を交差させ、男の繰り出した足を受け止める。続いてシュンに向けて繰り出された裏拳は空を切り、男の足へと向けられた銃口から吐き出された鉄火が男の両膝を破壊する――はずだった。
男の足元のコンクリートで銃弾が跳ね、甲高い音を響かる。シュンが動揺を示す暇もなく男は腰を捻り、しならせた足をシュンの脇

腹へと叩きつけた。
ガードの上から押しのけられ、着地と同時に起き上がる。今目にした不可解な現象の答えを求めるように巨大なスキンヘッドの男――ミリガンを前に、シュンが言葉を小さく落とした。

「宿主、か？」

彼の言葉の意味を理解したのか、ミリガンは顔をにやつかせ、あまつさえ伸びをして見せる。銃を構えている相手に対するにしては無防備すぎるその動作にも、シュンは神経を尖らせ、緊張を緩める様子はない。ひとしきり体を伸ばし終えると、今度はシュンに向かって撃ってみろとばかりに指を屈伸させた。
表情を変えることなく、シュンは照準をミリガンの胸へ向け、三度引き金を引き絞った。弾丸はミリガンの肉体に届くことなく、何かに押さえられたように動きを止め、床で跳ねた。
銃の有用性は皆無と判断し、得物をナイフへと切り替える。二本のナイフを引き抜き、双方順手で構えを取る。ミリガンはおどけた表情で大げさに驚いて見せ、再度シュンに対し指を屈伸させる。

「リョウ、少し離れろ」

シュンの言葉に従い、リョウが数歩後ずさる。それを確認し、体を左右に軽く揺らす。
相も変わらず、からかうように踊りながらシュンを観察していたミリガンの目が、見開かれた。目の前に迫った重厚な殺気に、思わず後退する。しかし、その足が地につく前に、その体は竜巻に巻き込まれていた。
四方八方上下左右で白刃が閃く。その刃の巻き起こす太刀風は大気を裂き、所々に真空を作り出す。ミリガンの皮膚が裂かれ、初めてその血を滴らせた。

しかし、焦りを感じたのはミリガンではなく、ナイフを振るい、有利に見えるシュン自身。彼の攻撃が生んだ余波により、ミリガンは傷を受けている。しかし、己が振るうナイフは一度たりともその体に触れることができない。同じ極同士の磁石を無理に近づけた時のように、ナイフの刃は何かに押しのけられるだけだ。

その凄まじい攻撃は、スタミナの少ないシュンの体力を数秒で食いつくし、その動きを鈍らせた。

攻撃が開始された一瞬、攻撃を受けぬ自身の優位性を忘れ後ずさったものの、ミリガンは既に冷静さを取り戻し、動きの鈍ったシュンを蹴り飛ばす。

シュンの体が後方へ押しのけられると同時に、ミリガンの体がよろめいた。無造作に突き出された足に弾き飛ばされる瞬前、シュンが蹴り上げた足がミリガンの顎を捉え、足は確かな手応えを主に伝達した。

シュンは後方へ転がり、体勢を立て直す。その間、頭を振るい意識を戻そうとするミリガンの頭部へ、リョウが手近に拾った木箱の蓋を振り下ろした。鈍い音と共に板は坊主頭に直撃し、巨体が再びよろけた。

ならばもう一度、と再度振り下ろした木の蓋はミリガンの顔面に衝突する寸前で勢いを失い、止まった。リョウは即座に後方へ跳び、迫るミリガンの拳をその蓋でガードする。鈍い音と共に綺麗に割られた板をミリガンに投げつけ、さらに後退する。

「（兵士時代の近接格闘の腕は鈍ってるのか？）」

投げつけられた板を腕で弾き、リョウを追撃しようとしたミリガンの大きな背中に、冷や水を浴びせるような嘲笑が届いた。

勢いよく振り向いた彼の肩に急速に近づくナイフは直前で僅かに逸れ、服の肩部分を貫いて止まった。目を上げたその顔に再度ナイフが迫り、こちらはあわてて避ける。さらにもう一本が投擲される

ことを見たミリガンは、慌てた様子で服に刺さっていたナイフを投げ捨てた。
最後に飛来したナイフは再度その速度を急速に落とし、床で金属質の音を立てた。全ての攻撃が無意味に終わったにも関わらず、シュンの顔に笑みが通った。

「なるほど」

シュンは余裕ありげに懐にしまっていた手を引き抜き、同時に猛然とミリガン肉薄する。
しかし、シュンの攻撃は初手に限られ、瞬く間に避けることすらできぬ、防戦一方の状況へと追いやられた。
だが、この状況で顔を歪めたのは攻撃を仕掛けるミリガンだった。シュンの防御は放たれた蹴りの脛（すね）を殴り止め、顎に迫る拳は肘打ちで打ち返す。大した傷にならぬとは言え、塵も積もれば山となり、使用者に痛みを訴える。
横になぐような蹴りをシュンに受け止められた直後、ミリガンの顔がそれまでにない鋭い痛みに歪み、シュンとの距離を離した。ふくらはぎに触れた掌には、ぬるりと生温かい液体が付着し、手を紅色に染めた。状況を理解しかねていたミリガンの耳に、シュンの冷静な声が届く。

「（お前の能力は、武器と認識した物からの攻撃を無効化する、だろう？　なら、武器だと認識されていないもので攻撃すればいい。簡単だろ？）」

解説をしつつ、自身の武器とした血濡れの釣り針を軽く振って見せる。それを見たミリガンの顔が、驚愕から嘲笑へと変わった。

「（よく俺の能力が分かったな。だが、それを武器と認識すれば再

び無効化できる俺の能力は変わらねえんだよ、マザーファッカー！）
」

傷を受けた釣り針を武器と認識すると同時にその巨体を前方に押し出し、銃を構えたシュンに無警戒に突進する。その銃口から放たれる弾丸は彼の肉体には何の被害をもたらさない。その事実がある以上、彼にとって銃など鉄の切れ端にすぎなかった。――その事実があるまでは。

膝が吹き飛んだような衝撃を受けて倒れこみ、ミリガンは蛙のように地面に這いつくばった。遅れてやってきた痛みが彼の膝に火を放ち、否応なく悲鳴を上げさせる。

「（武器を所持できないってのも、お前の能力のうちだろ？　忘れてたか？）」

膝に加えて肩を撃ち抜き、ろくに動くこともできなくなったミリガンにシュンが歩み寄る。近くにしゃがみ、先ほど釣り針で引き裂いた足の傷口に指を差し込み、呻くミリガンに構わず、傷口から若干の肉片と共にもう一つの釣り針を引き抜く。

「リョウ、任務完了だ。こいつは連れて帰ろう。何か聞き出せるかも知れない」

ミリガンの服を裂いて止血帯を作り、自身の作った傷口を縛る。一通り作業を終えたところで、パチパチと、ふざけたような拍手の音が倉庫内に響いた。リョウが振り向いた先、入口に背を預け、一人の男が立っていた。

4　復帰（後書き）

最近気づいたんですが、一話四千字以上書くのに二週間かかっているんですね、私。この調子じゃあ少し後にストックが……。まあ、なんとかします。

読んでくださっている方がちゃんといるようで、初心に戻って一日一人の読者にも喜んでいます。みなさん、読んでくださって本当にありがとうございます。

5　宿主

「いや～、流石ですねぇ。腕は鈍っていないようだ」

その場にそぐわぬ間延びした声を流し、帽子で顔を隠した黒いスーツ姿の男がシュンにスタスタと軽快に歩み寄る。顔は分からないものの、その声が、姿がシュンの嫌悪する依頼主であることを示していた。

「『仕事場』を見学か？　随分と仕事熱心だな。いつ改心したんだ？」

「雇用主が人を雇う際には、相手を吟味するものだろう？」

シュンの言葉に答えた言葉はそれまでの軽い口調が嘘であるように、深い落着きと共に発せられた。

帽子を深くかぶり、ふざけたような軽い口調で必要なことだけを告げ、消える。依頼の報酬はいつでも帰りついた家に置かれている。帽子の陰から見える口元だけが、この男の唯一見える部分だった。

「だが、雇われる側も雇い主が信用できない場合、色よい返事はしない。特に、顔も見せない不審者相手で、散々こき使ってきた相手となれば、な。そう思わないか？」

シュンの言葉を聞いた口元が柔らかな弧を描き、あっさりとうなずいて見せる。

軽い動作で頭に乗った帽子を取り、その見覚えのあるハンサムな顔をさらけ出す。

『オリーブ』の経営者、肩書きを述べるならばそれで事足りる。しかし、彼を見知っている者からすれば、平静を保つことは難しい。

しかしその顔を目にした途端、シュンはそれまでの渋面を崩し、カタカタと笑い出した。

「どうかしたか？」

「いや、泣き黒子の位置が左右逆だ」

「おっと、うっかりした。失敬」

言いながら顔を一瞬掌で覆い、再度その顔を見せた時には、黒子の位置は移動を終えていた。

薄く笑い、二十面相と呼んでみるか？　などと嘯く。くるくると帽子を手で弄びながら、試すような視線をシュンへと向けた。

「俺は依頼を受ける気がないことを忘れたのか？　今回は例外だ」

「全く、目ざとい。いや、耳ざといと言うべきかな？」

口調こそ変わったものの、警戒心を抱かせぬその飄々とした雰囲気は変わらない。同意を求めるように向けられた視線に、リョウが戸惑った表情で視線をさまよわせた。

「いや、まあ確かに。だけど、シュンの言う通り、雇われる気はないぜ」

シュン同様拒否の姿勢を示す彼の姿のどこが滑稽なのか、含み笑いをもらして帽子をかぶる。

「まあいいでしょう。ただ、報酬を渡すついでに話をしたいので、ご足労願いますね？」

帽子をかぶった途端に再び聞きなれた、からかうような口調がもどり、出口に体を向けながらシュンとリョウに言葉を投げる。

「まあ、ご友人の死体を回収する時間ぐらいは差し上げますが」
リョウはその言葉を聞いた途端、失念していた事実を再認識する。灰色の床に落ちるレンの肉体に沈鬱な表情で近づき、身を屈める。シュンはその背中に歩み寄り、肩を軽くたたく。
「何沈んだ顔してんだ？　ばかばかしい」
シュンの不謹慎な言葉に理解が至らないという表情のリョウに、シュンがため息を吐きかけた。リョウを後ろへ押しやると、床に倒れているレンの耳を持ち、そのまま持ち上げる。
「いててて！　耳が取れるだろ！」
それまで倒れていた姿が嘘だったかのように、レンはシュンの手をつかみ悪態をつきながら立ち上がった。それを見たリョウの思考がようやく目的地へとたどり着いく。
「こいつの基本戦術は『騙し打ち』だ。死んだ振りくらいはお手のもんだよ。つーか、お前は加勢ぐらいしろ」
「仕方ねえだろ！　武器が効かなきゃ俺は生卵と変わらねえんだよ」
「当たれば中身をまき散らしつつ砕け散る、か。否定はしないがな」
シュンの言葉に深々とため息をつくレンを意識的に無視し、依頼主に対して目配せをする。
レンの生還に何の感動もなく、ただ肩をすくめると、和やかなふざけあいを続けるレンとリョウ、黙するシュンに対し、付いてくるように合図を送った。

▼

『宿主』、この言葉がまことしやかに囁かれるようになったのは十年ほど前からか。

特定の行動をすることで超自然的な現象を可能にする超能力者、そんな夢物語は立ち枯れすることなく、人々の話題に一つの種を提供し続けていた。

チェイサーの助手席から窓を流れ行く町の光に目を向け、取りとめもなく思考を巡らせる。今移動している高速道路も、時間のせいか時折車体を軋ませながら通り過ぎる大型トラックを含めても、道を走る車はほとんどいなかった。

運転席に目をやると、そこにハンドルを握る男の姿が。何故か車の中であるにもかかわらず帽子を被り、顔を隠したまま運転している。この男の場合、前が見えているかを心配する必要はないにしろ、やはり確認したくなるのは一種の危機管理能力なのだろうか。しかしその前に、告げておくべきであろうことが、シュンの頭に浮かんでいた。

「つけられてるぞ」

「そのようですね」

それだけの短い会話を交わし、サイドミラーを覗く。見受けられるのがトラックばかりだ、と言っても普通の乗用車もいないわけではない。例えば、現在後方に見受けられる黒のセドリック。一度高速道路を下り、再度入りなおしたにもかかわらず、まだ後ろにいるのはどう贔屓目に見ても不自然だった。

狙いは順当に考えればシュン達自身だろうが、この場合ミリガンの回収ということも考えられる。『宿主』はやはり貴重な戦力なのだ。

「撒けるか？」
「先ほどから試してはいるんですがねぇ、遮蔽物となる普通車がないのはどうも……」
「だろうな。スピードを上げろ」

シュンの言葉と共にエンジンの回転数が急激に増加し、体がシートへ押し付けられる。それと共に後方のセドリックも速度を上げ、やはり距離が開くことはない。
覗いていたサイドミラーに後方の車内で会話する姿が映った。何やらせわしなくゼスチャーを交えながら会話がなされ、運転席の人間が頷く姿が目に入る。

「一応聞いておくが、撒く気はあるか？」
「まあ、それはそうですね」
「この車がスクラップになってもいいか？」
「……仕方ないでしょうね、この際」
「なら、次の分岐を左に曲がってから、運転を代われ」

しぶしぶながらも承諾し、男はシュンの指示通りに分岐点を左に進む。シュンがハンドルを握ったことを確認すると、男は座席を後方に目一杯に倒し、そのまま後部座席に移り、空いた席にシュンが体を滑り込ませる。
しばらく速度を変えずに進んでいた車のアクセルを、シュンが目一杯に踏み込んだ。左右の窓から流れる景色が目で追える速度を超え、飛び去っていく。後方のセドリックも変わらずにその速度に追いつき、もはや追っていることを隠そうともしていない。
左折注意の看板が飛ぶ景色の中を流れ去り、前方から明滅する左向きの矢印が急速に近づいてくる。
リョウが慌ててシュンに速度を落とすようにと、運転席に顔を出した瞬間。

「つかまれ」

淡白な一言が耳に届いたと同時に、ふと視線を上げたリョウの目に映った光景が、彼の脳を麻痺させた。数m先には矢印とコンクリートの壁。このスピードじゃ止まれないだろ、停止した思考に浮かんだのんきな考え。事実、止まらなかった。

ためらいも、減速も存在しない急激なハンドル操作は強引に進行方向を捻じ曲げ、その鼻先を再度道へと向けた。しかし、慣性の法則に従い、車体は速度をそのままに、横倒しに回転する。さらに車体といういびつな形が路上で回転を続けることは叶わず、虚空へとその重量を跳ねあげ、乱回転しながら再度重力に引き寄せられる。車体は回転する棺桶と化し、下を走る道路に直行した。

▼

ぼんやりと霞のかかったような頭を振い、思考をはっきりさせようと試みる。ゆっくりと視線を上げると、天井が異様に近く感じられた。横に目を向ければ、歪んで開きそうにないドアと、割れた窓ガラスが目に入った。

「起きたか？」

シュンの声らしき音声を認識し前を向くと、こちらもクモの巣のようにヒビの走るフロントガラスが。そこまで状況を確認し、ようやくリョウの脳が正常に活動を開始する。

「あれ？　どうなった？」

勢いよく体を起こし、最も詳しいであろうシュンに状況を尋ねる。

左右を見れば、未だ眠りについているレンと、つぶれた帽子を直す男の姿が目に映った。

「着地が予想外にうまくいってな。車軸やなんかの走行に必要な部分が、走れる程度には無事だったんだ」

「まったく、自殺でもしたのかと思ったが、まさかあそこまできれいに下のに着地するとはね。新しいスタントとして売り込んだらどうだ？」

どうやらシュンはある程度下の状況を把握したうえであの行動を取ったらしい。しかし、その程度の説明で納得するほどの寛容さを、リョウは備えていなかった。正直、頭部のコブはコブ取り爺さんを呼びたいサイズだ。

「ただ逃げるためだけにあんな飛び降り自殺未遂するんじゃねえ！」

「俺だって何の考えもなしに飛び降りたわけじゃねえよ。あいつらが追っかけてきたってことは、何らかの発信機が取り付けられている可能性もある。そいつの破壊。加えて、俺たちと同程度の速度で追いかけてきてたとすれば、壁に追突したかもしれない。厄払いだよ」

「……ああ、そうですか」

信じられるか、とその表情に浮かぶ不審を眼の端に捉えながら、左折する。ふとそこでリョウの頭に疑問が一つ、顔をのぞかせた。

「そういや、お前。行き先分かってんのか？」

「いや。全く」

あたかも当然であると言わんばかりのシュンの返答に納得しかけ、ふと気付く。

「ああ、なるほど――って、はぁ？　じゃあどこに向かってんだよ？」
「どこにも。そいつが起きるのを待ってたんだよ」
バックミラー越しにリョウの顔を見つめ、親指で未だ帽子を弄っている男を指す。
「話すことがあるのはそいつだ。用があるならここで言えばいい」
車を走らせながら鏡越しに目を向け、男の表情を窺う。男はあきらめたようにため息をつき、帽子を弄っていた手を止めた。帽子を膝の上に置くと、指を合わせ、シュンからの視線を見返す。
「まず銀、と名乗っておこう。いつまでも代名詞では困る」
「で？　あんたの用ってのは？」
全く変わらぬ呼称にため息をつき、失望を払うかのように首を軽く振った。隣ではリョウがレンを起こそうと、耳を引っ張っているが起きる気配はない。打ちどころでも悪かったのかもしれないが、そう心配する必要があるほど、貧弱な連中ではないと銀は十分に理解している。
「君たちを雇いたいと言ったのは他でもない。今回のような事態を想定してのことだ。シュン、君はどうやら知っていたようだが、『宿主』と呼ばれる連中のことだ」
「出鼻くじいて悪いんだけどさ。何だ、『宿主』って？」
レンの耳を引っ張って遊んでいたリョウが顔を上げ、いかにもついでと言わんばかりの適当な口調で質問を投げた。話を早々に中断

され鼻白む銀に代わり、シュンが口を開く。
『宿主』の全体数は不明。極端な話、全人類が宿主である可能性もある。彼らは能力を発動させる際、引き金となる行動を行う、またはその状態を維持する必要があり、それが分かっていなければどのような能力だろうと発動することはない。つまり、それを偶然発見した者だけが超自然的な現象の使用が可能となる。

「だから、厄介な能力の保持者でも、能力のカギが分かれば対策がとれる。ミリガンみたいにな。まあ、例外もいるが」
「そう。さらに、ある程度『制限』もかかる。もういいだろう、本題だ。最近、『宿主』が大量に存在しているとされる地域が確認された。当然、さまざまな組織が宿主の力を欲する現在、その地域が標的になることは目に見えている。さて、ここまで話せばいいかな？」
「なるほどな」

応えたシュンの返事は重く、状況の深刻さを推し量ることができる。――はずなのだが。

「え？　それだけ？　遮った意味ね～！　つーか説明のほうが長――」
「リョウ」

一人状況を理解せずに騒ぐリョウに対し、シュンはハンドルを操作しながら至って冷静に呼びかけた。はい、と何故か礼儀正しく聞き返すリョウに対し、シュンは冷たく先を続ける。
「とりあえず二千万回ほど死んでバカを治せ」

多いだろ、流石のリョウもその一言を口にすることはできなかっ

た。

5　宿主（後書き）

今更ながら説明を。▼は短い時間経過を＊は長めの時間経過を指します。確たる基準を設けていないのでかなり曖昧なんですが。

さて、もうじき序章が終わります。自分でも面白いかどうか自身が持てないモノを投稿しているのは何とも不安ですが、読んでくださる方がいる限り書ききる覚悟ですので、どうかお付き合い願いたいと思います。

6　転機

シュンは全員を乗せたまま鉄二の家まで車を走らせ、銀に運転を代わった。

「では、また明日」

不快な一言を残して去る鉄クズ同然の自動車を見送り、リョウとレンを鉄二の家に入れる。既に床に就いたであろう鉄二に配慮しつつ、廊下を軋ませる。

「おい、シュン。お前どうしてわかったんだ？」

リョウの言葉に振り向き、シュンが視線を送る。その反応を疑問ととらえ、リョウが続ける。

「ミリガンのことだよ。あいつの能力」

「少し声を落とせ。あいつはもともと軍隊に属していた。普通ならナイフなり何なり隠してるもんだ。ボディチェックをする前だったから、武器を持っていたなら俺たちを殺すときに使わないのはおかしい。それだけだ。ナイフを確認のためにやってみた。そしたら、勝手に答えを教えてくれただろ？」

簡単に説明しながら扉をくぐり、一枚しかない布団を敷く。

「じゃんけん、ポン！」

じゃんけんで掛け布団、敷布団、枕の争奪戦を繰り広げたのち、それぞれの分け前を手に寝転がる。

一旦横になると、枕を抱えて不服そうにしていたリョウも疲れが出たのか、何も言うことなく深い眠りに落ちた。

▼

カーテンのない窓から金色の光が差し込み、部屋を徐々に浸食していく。

リョウは顔にかかった朝日を払うような動作を幾度か繰り返し、瞼を上げた。周囲を見回し、状況を確かめる。昨夜のことを思い出しながら、伸びを一つ。枕のみで固い床の上に寝ていたために痛む節々を擦り、立ち上がる。目をこすりながら改めて見下ろせば、未だぐっすりと眠っている二人が目に映った。

――こうなったらやるしかない！

何故か決意めいたものを内心で呟くと、どこから取り出したものか、油性マジックを握りしめる。

ゆっくりと仰向けに寝転がるレンに近寄り、傍にしゃがみ込むとその顔に手を伸ば――

「何やろうとしてんだよ」

手が別の手に掴まれた。レンも伊達に汚い仕事をしてきたわけではない。常人に比べ、悪意や害意の察知能力ははるかに優れている。とは言え、このような場面で役立つとは思いもしなかっただろうが。

「え、いや、起きぬけのメイクを……」

ごまかそうと目をそらすリョウに、レンが目元をひくつかせ、その横顔を睨みつける。ひとまずその手を離し、伸びをする。リョウと同じように周囲を見回し、腕を枕に未だ正体なく眠り続けてるシュンに目を留めた。そして、リョウからマジックを受け取る。

「シュンには止めとけ」

リョウは冷静にレンを引き留める。そのどこか達観した様子が、僅かな時間レンの行動を引き留めた。

「俺も前やろうとして……まあ、やりゃあ分かる」

ひとり頷くリョウをしり目に、レンがマジックのキャップを外し、シュンの近くにしゃがむと、ゆっくりとその手を伸ばす。レンはシュンの顔を窺いながら慎重に手を近づけていくが、未だ目は閉じられており、起きている様子はない。さらに手を近づけ、その先端が顔に触れようかとした時、ようやくその手が掴まれた。

内心安心しつつその手を戻そうとして、レンは気づいた。シュンは未だ眠っていることに。

疑問を感じるより早く、その腕が強く引かれ、咄嗟のことにバランスを崩したレンの胸元にシュンの手が伸び、さらに強く引きせる。声を上げる暇もなく、レンの体はシュンの体を越え、床に背を打ちつけた。

「な？」

上から覗きこむような姿勢で自身を見下ろすリョウに、レンは口を開けたが、空気の入っていない肺では声を出せるはずもなかった。

リョウは肩をすくめるとシュンに近づき、揺すり始めた。

「おい、起きろ。ユッサユッサ――」

声を出しながら拍子をとり、揺する。しばらく揺すり続けるとシュンがうめき声を上げ、寝返りをうつ。さらに執拗に揺すり続ける

と、シュンがようやく瞼を上げた。
「なんだ？　せめて後――」
「後五分なんて言わせねえぞ！」
「――五時間」
単位が違った。
「そんなに寝かせてられるか！」
リョウは刹那思考停止状態へと移行したが、すぐに声を上げ、さらに強くゆすろうとシュンの体に手をかけた、その時。ドアノブの回る音が室内に響いた。
レンとリョウが勢い良く振りむき、戸口に立つ老人に視線を向けた。
見覚えのない二人組を視界に収めながらも、シュンの姿を確認した鉄二は問題ないと判断したらしい。二人に対し特に声をかけることなく、半分眠っているシュンに目を留めると、手に持っていた玄翁をシュンに投げつけた。
投げ方は適当だが、その質量は十分に凶器となる。しかし、飛来する鉄塊はシュンの掌に収まり、その動きを止めた。
再度目を開けたシュンの眼球に、仁王立ちする鉄二の姿が映った。数秒間かけて脳をゆっくりと回転させ、そうか、と呟いて体を起こす。
「今日が最後でしたね」
先ほどまで眠気の混じっていた声が瞬時に切り替わり、滞りない動作で体を起こし、既にドアから姿を消した鉄二を追いかける。
シュンは鉄二の背を追い廊下を軋ませ、未だ火の気のない鍛冶場

を通り抜け、朝日の元へ全身をさらした。昨晩まで何もなかった鉄二の家の前には木製のテーブルが置かれ、その上になにやら液体の詰まった多量の酒瓶が置かれている。
訳も分からずついてきたリョウとレンはその場に立ったまま成り行きを見守っている。
二人の視線の先で、シュンが鉄二から野太刀を受け取った。
一口に野太刀と言っても、その長さは様々。だが、シュンの手にしているそれは明らかに長く、刀身だけでシュンの身長を上回っている。
大気に刀身をさらすその野太刀をシュンは慎重に数回振り、自身の背後に刀身を向け、腰を落とす。一度制止させてからさらに刃を持ち上げ、地面と刀身が水平になるように構える。

「よく見といてくれよ。後で確認するから」

軽い口調でレンとリョウに向かって言葉を発し、再度口を開く。
シュンの目つきが鋭く研がれ、カミソリのそれと同等の輝きを発する。僅かに風が吹き始め、雲が流れだす。
雲が陽を覆い、瞬間日陰を作りだす。その直後再度降り注いだ日光が瓶に反射した。

「うん？」

レンが疑問に眉を上げた直後、酒瓶の上半分がそろって宙を舞った。数瞬の空中浮遊の後、再度同じ場所に着地した瓶の上部分に収められていた液体がすべて同時にゆっくりと流れ出し、テーブルを伝い地面に滴り落ちる。
シュンは大きく一つ息を吐くと、ゆっくりと姿勢を戻し、振り向いた。
二分された酒瓶はそれぞれが光を反射し、シュンが手に持つ乾い

た刀身を照らした。

▼

「で、なんなんだよ？」

鉄二の家に持ち込んだ荷物を巨大な風呂敷に包み、出立の準備をするシュンにリョウが問いかけた。やや曖昧なその問いに対し、シュンは布団を配置しながら答える。

「お前、剣の切り方を知ってるか？」

「は？」

「切り方の簡単な捉え方として、西洋剣は力で叩き切り、日本刀はその形状を活かして技術で切る。そこまではいいか？　で、その両方を取り入れた剣術がさっき俺がやって見せたやつだ。力を速度に置き換え、日本刀の切れ味と形状を活かして切る。そういうことだ。まあ、適性がないと使えないらしいが」

「訳がわからん」

妙に誇らしげな答えにリョウの、シュンは鼻を鳴らした。

「やっぱりお前は二千回ぐらい死ね。もういい、行くぞ」

唐草模様の巨大風呂敷に包まれた巨大荷物を先に窓から下ろし、自身も鉄二から受け取った野太刀を手に、窓から飛び降りる。華麗に着地し、荷物を背負いなおすと、外で待っていたレンに視線を向ける。

その視線を感じたのかレンが振り向き、欠伸をする。

「お前、この後どうすんだ？　俺とリョウは家を持ってるけどよ、

お前確か家ないだろ？」
「もう、一軒借りる準備をしてあるよ。万年空き部屋のある貸家だからな。つーかその言い方だと俺が浮浪者みたいだろうが」

レンとリョウは元は零番街の元締め的役割であったため、それぞれ家を確保している。対してシュンは元から住人であったとはいえ、家に帰ること自体が少なかったため家を別の「家族」に占領され、現在は流れのまま、歳月を経て劣化した廃墟に寝泊りをしている。そのため、一月前のような大雨が降ると退避せざるを得ないのが難点ではあったが、他に不自由はしていない。大勢の友人たちから誘いは来るのだが、何故かシュンは断り、ホームレス生活を続けていた。

「まあいいや。じゃあな。多分あいつから連絡が来るだろ。そん時にまたな」

それだけ言うと、もう用はないとばかりに背を向け、適当に手を振りながら別れる。
微かに聞こえたくしゃみに薄く笑うと、シュンは振り返ることなく零番街を後にした。

▼

零番街の先、と言っても一ブロック離れた位置にある三階建てのアパート――些か以上に古い――の前に辿りつく。
一度外観を確認し、適度に育った雑草の茂る敷地に足を踏み入れようとしたその時。

「こら、待てー！」

怒鳴り声が響き、その声に追い立てられるように、玄関の引き戸が乱暴に開かれた。
開かれた戸口から飛び出る人物の顔に、シュンは思わず嘆息する。
「またお前らか……」
誰にともなくつぶやき、一度脇に避け、ひょいと足をつき出す。逃げることに必死になっているまず一人。シュンのつき出した足に引っ掛かり、バランスを崩す。なんとか踏みとどまろうと宙に泳ぐその背中に、後ろを確認しながら走りこんだ二人目が激突し、倒れこんだ二人に三人目が蹴躓(けつまず)く。
奇妙に絡み合い、もがく三人の横にシュンがしゃがみ込んだ。
「あんたら、懲りないね」
揃ってシュンの方へ向けられた顔が、数分後、揃って付近の交番前に放り出されていた。

6　転機（後書き）

まずお礼を。さっそくお気に入り登録ありがとうございます。気づいたら増えており、結構感動しました。
序章はここまでです。また、ここまで読んでくださりありがとうございます。今後も末永く……いや、面白いと思っていただける限り、よろしくお願いします。
私の中で、ですが主人公はそこまで「最強」ではありません。後々彼の能力なども登場させますが、まあ色々と制約が。基本能力の高さは認めますが。
まあとにかく、これからも読者の皆様を楽しませることができるよう、見えないところに伏線を張り、先読みできない罠を仕掛けていこうと思います。

7　お節介

「人の家に訪ねてきて本読んでるってのはどういうことだ？」

特に機嫌を損ねた風もなく、ただ社会的な常識を伝えるような口調で、シュンは言った。

その言葉に、目を落としていたリョウが目を上げた。

「なあ、もし女子高生がマネジメント読んだら実際どうなると思う？」

「あん？」

リョウは読んでいた本の表紙をシュンに向け、題名を見せた。近頃流行りの、ドラッガーのマネジメントを物語形式で分かりやすくに解説したものらしい。

顎に手を当て、リョウの質問に対し少々思案し、顔を上げる。

「今の女子高生がどのレベルかは知らんが、『良く分かんな～い』って言って本棚に封印するか、古本屋行きだろうな」

「……小説になんねえじゃん」

「そりゃそうだ」

＊

先ほどまで晴れていたのが嘘のように、断続的な音と共に強烈な雨が視界に霞をかけ、雨どいから大量の水を吐き出させている。窓から見える敷地は泥でぬかるみ、あちこちに小さな池を造り出していた。もう逃げ場のない水を自分と重ね、目をそらした。

良い香りを漂わせる畳に寝転がり、壁に浮き出たシミを眺める。

この部屋に入ってから三日経つ。正直、最初は人の住める状態ではなかった。大げさではなく、畳は全面が毛羽立って平面はなく、部屋中が蜘蛛やダニ、その他多数の生物が自身のテリトリーを主張していたのだ。

先に部屋を覗いていたため、新しい畳の用意や覚悟はできていた。しかし、やはりそれでも住んでみると予想以上に酷いものだ。この部屋が『都』になる日は来るのかと息を吐き、改めて部屋の中を見回す。

狭い台所と、そこにつながる仕切りなしの四畳ほどの居間には長方形のちゃぶ台一つと、押入れを示す破れたふすま。和式トイレと風呂がついていることが唯一の利点かもしれないが、それだけだ。壁には雨が滲んだと思われるシミが大きく幅を占めていた。

自身の分身ともいえる装備一式は荷物を――蒲団と服だけではあったが――詰めてきた風呂敷に包み、部屋の隅に置いてある。

一通り部屋の内部の確認を終えてしまい、他にやることもなく傍らに置いてあった刀を手にする。

長い。太平記に登場しそうなその長さは、人が扱うことを拒否しているようにも見える。

事実、腕を伸ばしきっても抜けないため鞘には切れ込みが入れられている。

警察関係者に見つかれば確実に事情聴取を受ける代物だが、どうせこの部屋に来るのは大家の快活な、細かいことを気にしなさそうな老婦人か、リョウぐらいのものだ。

そう考えを巡らせていたシュンの思考は、古びたインターホンの音によって中断される。

リョウでも訪ねてきたのかと外を覗くと、緑色の帽子にそれに付随する制服を着た青年の姿が目に映る。宅急便だと気づきドアを開けるも、荷物が届くあてなどまるでない。

「こちらはレイブン＝シュン様のお宅でよろしいでしょうか？　よ

ろしければこちらにサインか判をお願いします――はい、ありがとうございました」

届け先の名前とシュンを見比べてから帽子を脱ぎ、深く頭を下げる。シュンは労いと会釈を返し、相手の姿と雨音をドアで遮った。

軽い音を立てて閉められたドアを、シュンは受け取った重い荷物を手に数秒間睨みつけた。

宅配業者の青年は確かに『レイブン』という名で荷物を届けに来た。荷物の届け人の欄にも、その名が書かれている。だが、その名を――シュンのマスコットネームと彼をつなげられる者はまずいない。リョウやレンなどの零番街の中でも特に親しい彼らにさえ、その名は知られていない。恐らく、この世界中でもこの二つの名前を結びつけられるのは片手で数えられるほどしかいないだろう。

再度荷物の差出人欄に目を落とす。見覚えのない名前はどうせ偽名だろう。見覚えのある筆跡はやや丸みを帯び、柔らかく、女性の筆跡らしい。となれば……。

さして大きくないにもかかわらず、米でも入っていそうな重さを伝えるその箱の封を切り、中身を確認する。中身を包んでいる緩衝材の上に、簡単な手紙が置かれている。

『シュン君にまた必要になるんでしょ？　またどこかで』

「追伸、弾は自分で調達してね、か。随分と情報が早いな」

手紙を手に少しの間幸福な思考を巡らし、直後不快な可能性に気づく。だが、それを判断するにはまだ材料が足りていない。思考を中断し、中身を包んでいる緩衝材を取り払う。中身を目にし、思わずニヤリ、と笑みが走った。

しばし鑑賞したのち緩衝材を乗せ、再度ふたを閉じる。隠す意味も込めて押入れの空きスペースに押し込み、靴をはく。この雨の中で買い物と言うのは気が乗らないが、準備が早いに越したことはな

い。調整の必要もあるだろう。
シュンは傘を手に外へ出ると無造作にドアを閉じ、施錠。
錆びた階段に足を乗せ、そこで足を止めた。
階段の下、階段の入口部分に人影が佇んでいる。天気を気にするかのように時折空を見上げ、一向にやむ気配のない雨を見つめている。
シュンが止めていた足を再度動かすと、その音に気付いたのか一人がシュンを振り向き、階段を一段上って道をあけた。階段を下りていく過程で、その人影が少女であることが分かる。
先ほど道をあけた少女は焦げ茶色のベリーショートの髪、うっすらと日焼けした肌に大きな瞳と、快活そうな印象を受ける。
逆に、下に佇む少女は背中の中ほどまで届く髪をサイドポニーにまとめ、やや垂れた目と顔全体の緩やかな曲線がおとなしげな印象を与えている。
どうやら学生らしく、同じ制服に黒い革の学生鞄を提げている。
そのまま通り過ぎようとして、シュンはふと足を止めた。学生二人は既にシュンからは目を離し、再び届かぬ願いを抱きながら雨空を見つめている。

「失礼だが――」

シュンの発した言葉に、顔が二つ揃って振り向いた。続いて快活そうな少女が曖昧に疑問の声を上げる。

「はい……？」
「俺の家に寄らないか？　雨が止むまででも」

普段であれば、シュンもこのような軟派じみた行為をすることはない。だが、この一向に止む気配を見せない雨の中で、服を着たまま川にでも入ってきたような状態の二人を見れば、いやでも気には

なる。加えて、どうせ断るであろうとの予測もある。声をかけたのは一種の自己満足だった。

「え、いいんですか？」

シュンの言葉に快活少女がいかにもうれしそうに、顔を輝かせた。……ちょっと待て、思わずそんな言葉が脳内を走る。いくら濡れ鼠で止む気配のない雨を眺めるしかない状況だとしても、連れがいるとしても、いきなり声をかけてきた初対面の異性の部屋に抵抗なく入るというのは不用心に過ぎる。いや、誘ったのはこちらなので文句を言える立場ではないのだが。

「あ、そうだ。鈴音、この人大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。安心できる音がする」

言いながら鈴音と呼ばれた少女はもう一人を振り向き、微笑む。大丈夫、ってどういうことだ。とは思うものの、いきなり声をかけた自身のあやしさも十分に認識しているため、何も言えない。特に気にしていないのも事実だが。

しかしそれ以前に、シュンの目が捉えた情報がシュンの興味を別の事柄に移し替えていた。

鈴音の顔は確かにもう一人の少女に向けられた。しかし、その眼球は動いていない。通常、視線は無意識のうちに振り向く方向に向けられる。しかしそれがないということは、盲人である可能性が高い。

シュンは特にそのことには触れず、肩をすくめると二人を伴い再度階段を上る。今しがた閉めたばかりのドアを開け、客人を招き入れる。

「濡れた服は風呂場で脱いで、脱衣所にあるハンガーにかけてくれ

ればいい。服はこっちで準備しておく。いや、シャワー浴びたほうがいいか。まあ、必要なものは用意しておくから」

簡単に伝えて二人を脱衣所に追いやり、一息つく。三枚しかないワイシャツの残り二枚――つまり全て――とバスタオル二枚を用意し、脱衣所へ運ぼうとしたところで、備え付けられている電話のベルが鳴る。

今では絶滅しかけている、ダイヤル式の電話が備え付けられていることからも、この建物の築年数が窺える。手にしていた準備を机の上に投げだし、送話口に話しかける。

「はい……ああ、あんたか。もう雇い主だから敬語のほうがいいか？　まあ、どちらでもいいが。――なるほど。ああ、分かった。だが少し遅れそうだ。うん？　……いや、少しお節介を焼いてるだけだ」

短い会話を交わし、受話器を置く。同時に、雨音に混じって扉の開閉音が耳にとどく。

「すみません。体を拭くものありますか？」

手短に済ませたつもりだったが、その間にシャワーを浴び終えてしまったらしい。卓の上の一式に手を伸ばしながら返事をする。

「ああ、すまん。今持って行く」

「いえ、大丈夫です。私が取りに行きますから」

「そうか、悪いな。……うん？」

何の疑問も持たず、気を使っているのか、と考えたところでおかしなことに気付く。

「ちょっと待てぇ！」
「え？　あ、はい！」

そう言って少女は直立した。姿勢がいい、などと感心している場合ではない。

「花も恥じらう年頃のお嬢さんが思春期の男の前に不用心に肌をさらすな！」
「え？　はい、分かりました」
「劣情を催す輩も多いんだからよ」

シュンはそう言って小さく息を吐く。それ以前にやるべきことがあるはずなのだが、それを指摘出来る人物は、残念ながらここにはいなかった。
数秒の間を置き、シュンは拾い上げた着替えとタオルを少女に投げつけた。

「まあ、俺は気にしないからいいけどな」

良くない。だが、少女のほうはひとまず恥じらいを覚えたのか、受け取った衣類で体を隠しながら風呂場へ消えた。
素直な性格らしい、そう考えながら防寒用に念のため掛け布団を引っ張り出し、畳の上に放り出す。
僅かな間をおいて姿を現した二人の内、先ほど大胆な登場を見せた少女がさっそく布団を頭からかぶり、もう一人――鈴音も頭から包みこむ。
ワイシャツ以外に貸せるものがなかったのは事実だが、気温からしてそう寒いようにも思えない。現に鈴音は布団の中で首をかしげた。

「若葉、そんなに寒いの？　私はそうでもないんだけど」
「いえ、さっき『同年代の男性の前に肌を見せないほうがいい』と教わったので」
「お前はイスラム教徒か……」

シュンの中で彼女――若葉に対する評価が「素直」から「馬鹿」に変わった瞬間だった。

7　お節介（後書き）

ここから新章です。そして、ストックがもうありません。なんせ書くのが遅いもので……。

学校も始まるためしばらく更新が遅くなるおは思いますが、気が向いたときに読んでいただければ嬉しく思います。

ちなみに、サービスショット的な内容はまず登場しませんので、悪しからず。

8　経験と償い

「お前ら、ニンニク平気か？」

返事を受けてから油をフライパンにしき、少し温めてからニンニク丸一つ、四本分のニンジン、キャベツ一個半、もやし二袋の順番で刻んでおいた材料を放り込み、ふたをして振るう。

野菜に焦げ目が付いてきたところで適当に塩を振い、オイスターソースと絡めて大皿に盛り付ける。

「いっちょ上がり、と」

一人呟き、皿を持って居間――といってもほぼ一部屋だが――に戻る。ちゃぶ台の中心に山盛りに野菜炒めをのせた大皿を置き、白飯をよそっておいた茶碗と箸を取り上げる。

「いただきます」

声をそろえて手を合わせ、それぞれおかずに手を付ける。適度な塩味と野菜の旨みが絡み合い、出来は上々。――全体として通常とは言えない量ではあるが。

にわか雨だったらしく雨はとうに上がっており、シュンの前に座る少女二人は帰ることも出来るのだが……話を聞いてみればどうやら帰る場所がないらしい。

彼女たちの施設は現在までなんとか潰れることなく存続していたケースの一つらしい。しかし、つい先日施設の解体が決定。それぞれが身の振り方を決めるように指示された。それまでと同じように養子として引き取られるか、零番街に移住する。もしくは奉公のような形で住み込みで働く以外に道はないのだが、彼女たちは盲目の

鈴音のこともあり、決めかねていたのだろう。
そして、今日。施設から離れる前日、学校――通っている中学校の一学期終業式でもあった――の帰りに雨に降られ、雨宿りをしているところにシュンが声をかけた、ということらしい。傘も忘れたわけではなく、一人一本ないという状況で、ジャンケンに負けたために手ぶらだったそうだ。

「なるほど。だが、いくら困ってたからって、いきなり声掛けてきた男について行くってのはもうよせ。いくら施設がいい加減でも、『知らない人について行くな』ぐらいは言われたろ？」
「はひ、ふひはへむ。へも――」
「口が変形するほど物を詰め込んでしゃべろうとするな。呑み込め」
限界まで口に食料を詰め込み、まともに動かない口で荒々しく咀嚼すると、今度は喉を変形させて呑み込む。肉食獣でもここまで豪快な食事はしない、そう思わせる食事風景だった。
口の中身をあらかた呑み込んでから、若葉が改めて口を開く。

「非常識だとは思ったんですけど、父さんに――あっ、施設の管理者なんですけど――『善い人に出会ったら迷わずついて行って幸せになりなさい』って言われてるんです」

シュンは思わず額に手を当て、ため息をついた。
確かに、食いぶちは減らしたいところだろう。彼女たちを中学に通わせているのは恐らく一食分が安いにもかかわらず、十分な栄養を取ることのできる給食を食べさせるためと、子供たちを追い払い、自分たちが出稼ぎをするためだ。その施設にいた子供たちも放課後や休日はどこかで働いていたはずだ。
シュンは若葉から視線を外し、鈴音に視線を向ける。鈴音は再度野性的な食事を開始した若葉とは対照的に、料理を静かに口に運ん

でいく。そして、シュンが視線を向けると彼女もまた振り向いた。

「どうかしましたか？」

「いや、お前の目……見えるのか？　盲目だと思っていたんだが」

人によっては無礼だと感じるような質問を、シュンはあえて鈴音に尋ねた。それは、彼女の反応が、まるで見えているかのような動きだったためだ。「視線を感じる」とはよく言うが、まさか見られたことに瞬時に気付くわけではあるまい。

彼女が盲目らしいという判断は、一瞬だったとはいえ間違っている可能性は低い。

再度豪快に料理を腹に押し込み、若葉が口を開く。

「……良く分かりましたね。鈴音の目が見えないことに気付く人はほとんどいないんですけど」

「ええ、見えません」

「なら、どうしてそこまで正確に周囲のことを把握できる？　さっきから動きが盲人とは思えないんだが」

「……音です」

「音、か。だが、どこまで把握できるんだ？」

「大体全部です。さっきなら、首の関節が鳴った音で私のほうを振り向いたことが分かりました」

シュンはその言葉に首を傾げた。首の関節の音で首を巡らせたことは判断できるとしても、どのようにして首がどの方向にどれだけ動いたかを判断するのだろうか。

盲人は常人に比べ聴覚が発達し、通常の三倍の速度で発せられる音声を聞き取れるとも言われるが、それほどなのか。いづれにしろ、通常をはるかに凌ぐ聴覚であることは間違いない。

再度質問のために口を開いたシュンが問いかけるよりも早く、若

葉が口を開いた。

「鈴音は耳がすごくいいんですよ。黒板に書いた文字も音だけで判別できるんです！」

「……となると、盲学校じゃないのか？」

「はい、私と同じです」

若葉はそう言ってにこにこと笑いながら誇らしげに自分を指さす。仲の良い二人なのだろうが、「群れて」いるという印象ではない。同じ施設で育ったこともあり、どちらかと言えば姉妹といった感覚なのだろう。

他にも、体育の授業にも他の生徒と同様に参加するなど、テストを口頭で行う以外に特別な待遇は受けていないらしい。

「そりゃすげえな」

大量の料理の大半を腹におさめ、シュンは後方に手をついて体を支える。来客二人も箸を置き、落ち着いた様子だ。

緩んだ空気の中、頃合いを見計らってシュンは最重要の質問を繰り出した。

「ところで、お前らどうするんだ？　じきに居場所がなくなるんだろ？」

「そうなんです、よね」

今まで朗らかな表情を見せていた若葉の顔が、ここで初めて曇った。実際、居場所がなくなるという恐怖にも似た不安は、人を蝕む。

彼――シュンが頼めば零番街の連中は確実に、彼女たちの引き取りを了承するだろう。その感覚を零番街出身者の多くが経験したことがあるため――排他的であることもまた事実だが――彼らは同じ

経験を持つ者に対しては協力的であることが多い。そうすれば彼女たちの居場所は確保できる。しかし、問題もある。第一は、金だ。
既に彼女たちが自分の食いぶちを稼ぐための仕事場は周囲には無い。周囲の求人広告は零番街の住人でとっくに満員状態だった。
となると、二人は居候状態することになる。零番街のグループで、資金は増えず二人を引き取ることのできるほど生活に余裕があるグループは、ない。
分離させて別々のグループに分けるのも一つだが、この二人を引き離すのは気が進まない。鉄二に預けるという選択肢もあるが、彼に迷惑をかけるのも気が引ける。
しばらく優柔不断に思考を巡回させ、別の方策を探す。しばらく顎に手を当てたまま硬直していたシュンが、ふと顔を上げる。あまり気の乗らない考えではあるが、まあ仕方あるまい。

「ちょっとついてきてくれ。ああ、その前に制服に着替えろ」

それだけ言うと、自分はそそくさと外に出る。
ドアを閉め、待つこと数分。未だ乾ききっていない制服に着替え、二人が姿を現す。体にまとわりつく衣服が不快なのか、時折制服の各所を引っ張り上げている。
シュンはついて来いと手で合図し、階段に向かう。
雨上がりの湿った匂いが鼻にまとわりつき、思い出したかのように足元の水たまりへ雨どいから水滴が落ちた。雲の切れ間からは太陽がのぞいている。
一階に足を下ろし、少し先のインターホンを押すと、短く甲高い音が響き、来客を知らせた。曇りガラスの張られた、昔ながらといった風情の引き戸を前に数秒。ガラス戸を影がはい上り、濃くなった影が戸を引きあける。

「はいよー。……なんだい、あんたかい。なんか用かい？」

鈴のような、とはお世辞にも言えないだみ声と共に、老婆が姿を現す。身長はシュンの腰程度と小柄ながら、その釣り上がった目から妙な凄みを受ける。

「いえ、ちょっと相談が」
「なんだい？　同棲は別にいいけど、二人も侍らせるなんてねえ。この色男」
「いや、そうなるんですか。この二人が家を探しているそうなんです」
「それで？　どうしたいんだい？」
「いや、それが金がないようで――」
「そいつぁ、気の毒に。でも、タダはだめだね」
「でも、俺しか住んでないじゃないですか。空き部屋ばかりで。その中の一つくらい……」
「そうはいってもねえ、うちも慈善事業じゃあないんだよ？」

そこをなんとか、いいやだめだ、そんなやり取りを繰り返すこと十数回。ついにシュンが業を煮やした。

「ええい、もう面倒くせえ！　だったら俺がこいつらの分も家賃払ってやろうじゃねえか！」
「シュンさん――」
「へえ、中々粋な啖呵切ってくれるじゃないか、気にいった。畳の張り替えは私が面倒見てやるよ」

突如敬語をかなぐり捨て、威勢の良い啖呵を切ったシュンと老婆のやり取りは、困ったように首をかしげる鈴音と、好転した状況に顔を輝かせる若葉を完全に蚊帳の外に放り出し、会話を進展させていく。

シュンが保障者としてサインをし、若葉と鈴音にサインを求める。
「さすがにそこまでしてもらうのは……」
ためらいがちに口を開いた鈴音の意見にシュンが振り向き、肩をすくめる。
「どうせ月四千円しか払わないんだ。問題ない」
「そうそう、良いってことさ。困ってるんだったら、このお人よしに甘えときなって」
老婆は満面の笑みを浮かべ、胸を張り、ためらうような面持ちの鈴音に書類を押し付けた。
にやりと笑うシュンの顔が鈴音の眼球に映りこむ。
「同じ境遇のやつらを見つけると助けたくなるのさ。零番街出身の馬鹿どもはな」

▼

同時刻、零番街で鎚の音が響く場所。
相変わらず無心に鎚を振う鉄二の横に、長身の人影が佇んでいた。
「――そうか、試験を終えたか。お前よりも速かったな」
囁くような静かな口調で鉄二に向けられたその言葉は、若干のからかいを帯びて彼の耳に届いた。
「お前ぇさんも食えねえな。全部を見通してるみてえなこと言って、しかも全部見通してやがる。シュンが来るようにしむけたのもお前

ぇか？」
「ふふっ、お前が名前で呼ぶとは随分と信用されているな、あの坊やも。で、どうだ？」
それまでのからかうような口調が消え、落ち着いた口調に変わる。その変化が、雑談から本題に入ったことを告げていた。
「まだだな。あの習得法は所詮そのコツをつかむだけだ。実物を切るにゃあ、経験が足りねえよ。とは言え、あいつの『蟲』の力か、才能があることに違いはねえがな」
そこまで言って鉄二は顔を上げると、不敵な笑みを長身の男に向けた。
「俺が十年以上かかってやっと完成できた技術を一カ月で修得されちゃあ、かなわねえよ」
「ふっ、そうだな。ご苦労だった」
「あんたの頼みじゃなきゃ引き受けやしなかったがな」
鉄二の返答に再度笑いをもらし、長身の人影は空気に溶けるようにしてかき消えた。
「……まったく、どこまで見えてやがるんだかな」
老人の呟きと共に、鍛冶場は再び日常を取り戻した。

8　経験と償い（後書き）

結構遅れて申し訳ありません。実はまだ夏休みの宿題を終えておらず、現在もレポートを書いております。正直こんなことしている場合ではありません。いや、本当に。

文化祭も近く、そっちの台本にも手を出す予定のため、非常にシビアです。あ、でも無責任に放りだしたりはしませんので。

（無責任に執筆を延長したりはしますが）今後もよろしくお願いします。

9　情報

陰気な部屋。
カビ臭さの漂う室内は灰色のコンクリートで覆われ、中にいるものに強い圧迫感を与える。裸電球が一つだけ下がった薄暗い室内に、中央の机を挟んで二人の男が向かい合って座っていた。
しかし、その二人が対等の関係ないことは明らかだ。スキンヘッドの男は椅子に縛り付けられており、椅子に座りなおすことすら難しいだろう。
対する男は室内にもかかわらず黒い帽子を被り、顔を隠すかのように斜め下を向いている。

「（あなたもしぶとい。普通の人間なら、この部屋に長時間いるだけでプレッシャーに負けるでしょうに）」
「（俺を軟なジャップどもと一緒にするんじゃねえ、チキン野郎が）」
「（まったく、可愛げなのない）」

男は困ったように肩をすくめ、腕を組む。そこでその会話を打ち切るように、室内にノックの音が響く。
室内の二人が扉へと目を向けると、返事をするよりも早く、扉が内側に向けて開いた。

「なんのためのノックだったのかね？」
「室内にいるかどうかの確認のためだ」

シュンはスタスタとなんの躊躇いもなく部屋に踏みこんだ。ミリガンに一瞥を投げ、机の上に紙袋を放り投げた。着地の衝撃で袋の中身が僅かにはみ出る。写真だった。

「さて、俺は少しこのタコと話がしたい。出てくれるか？」

銀はどうぞご自由に、と言った風情でなめらかに腕を動かすと、席を立つ。開けたままの扉から外に出ると、後ろ手に扉を閉めた。

銀の腰かけていた椅子に腰を下ろすと、机の上に散らばりかけている写真を手に取った。

「（さて、お前に話を聞きたいんだが、どうせ素直に喋らないだろう？　だから、ひとまず俺のコレクションを鑑賞しようと思ってな。持ってきた）」

そう言うと手に取った写真を一枚ずつ、丁寧に机の上に配置していく。写真を一枚、また一枚とおく度に、ミリガンのうすら笑いが硬直していく。そして、シュンは配置を終えた写真を一枚を手に取った。赤い液体の中に、拳のようなモノが映りこんでいる。

「（さて、まずこれだが……ふむ、多分回転式のやすりで指を削り取った写真だな。やすりの音がうるさくて五指を全部削るまできづかなかったっけ）」

ミリガンによく見える位置まで写真を持ちあげ、数秒間見せてから自分で眺めなおす。薄く笑いを漏らしてから紙袋に収め、次の写真を手に取る。床で全裸の女性が口を空け、虚ろに天井を見上げている。

「（これは少し分かりにくいが、全身の関節を外したやつだな。顎の関節を先に外してたから、情報吐き切る前に気絶してた気がするな。こいつは――）」

次々とその凄惨な収集品（コレクション）をミリガンに説明していき、シュンが自慢話を終えたころには、ミリガンの表情筋は長時間の硬直に引きつったように痙攣を見せていた。
そして、最後にシュンがにこやかに問うた。
「（さあ、どれで拷問されたい？　……まあ、準備するまでゆっくりしてな）」
シュンはそのまま立ち上がり、ミリガンの腕に注射針を突き刺した。

▼

数十分後。灰色の扉が開き、シュンが姿を見せた。先ほどの部屋とは対照的に広々と、明るい雰囲気を見せる部屋の中に、丸いこげ茶のテーブルが一つ、パイプ椅子が四つ、人影が二つ。
「どうだった？」
椅子の背もたれにこれ以上ないほどに浅く腰かけ、文庫本を読んでいる。その横に置かれている椅子に座り、シュンが息を吐いた。
「ひとまずだが必要な情報は引き出せた。あいつはまだ薬の効果で朦朧としてるよ」
シュンがミリガンに注射したのは自白剤。
自白剤とは、フィクションに見られるような、投与すれば何でも喋り出すような便利なものではない。投与することで大脳上皮を麻痺させ、判断力を低下させるだけであり、薬物に対する抵抗が身に付いていればもちろん、意思の力ででもどうにかなる程度の代物だ。

また、真っ先に最重要の要件を引き出そうとしてもうまくいかないなど、コツもいる。
シュンがミリガンに「写真集」を見せたのも、彼の意思を弱める効果を狙ってのことだ。彼に自白剤を見せなったのも、彼に心の準備をさせないためだ。
軍隊に所属していた経歴から薬物耐性の心配もあったが、どうやら問題なかったようだ。

「あいつらも邪魔な存在を察知しているらしい。相手方は能力者の数も多いらしい。それと、現在は資金集めに重点を置いているらしいから、どこか潰れた組織が復帰を図ってるのかもしれない」
「そうか、ごくろうだった。こちらも丁度連絡を受けたところだよ」

そう言って銀は懐から茶色の封筒を取り出し、テーブルに放り出した。シュンが手に取り、中から紙を引き出す。

「どこからだ？」
「警察だ」

特異な依頼先の名前を聞いても、その場に動揺の類は見られない。
正直、シュンもリョウもその手の依頼は受けた経験がある。警察は後手に回らざるを得ない。だからこそ、彼らもできる限り様々な方法で情報を集め、予測を立てようとする。
それ故、犯罪が確実に発生すると考えられる場合――大抵は非合法な情報網にかかった情報からの判断だが――には、彼らのような裏方に依頼することも稀にだがあるのだ。

「で？　内容は？」
「学習塾への潜入護衛と言ったところか。どうやら、拷問集団が絡んでいるらしいが」

「拷問集団ってあれか？　子供を誘拐しちゃ、その子供の悲鳴を聞かせて金を巻き上げるっていう」

そこで初めて、リョウが文庫本から顔を上げた。

表沙汰にしないよう情報統制がかけられているようだが、人の口に戸が立てられないのは世の常だ。

拷問集団。子供――といっても大抵は中学生だが――を誘拐し、身代金を要求する犯罪者集団。この集団には大きな特徴が二つあり、一つはその名の通り被害者に肉体的苦痛を与えることだ。その際の悲鳴を電話越しに聞かせ、身代金をより多くむしり取る。誘拐の対象もある程度の金持ちの子供ばかりで、手当たり次第に誘拐しているわけではないらしい。

ここまではまだ内容的に納得できる。しかし、この集団の特徴とされるもう一つの点は、その悲鳴を上げていた被害者の肉体に何ら外相が見られないことだった。

被害者が演技で悲鳴を上げているとは考えにくく、現に発見直後の被害者は肉体、精神ともに疲弊しており、ろくに喋ることすらできない場合が多い。

「そうだ。私の考えでは彼らの特徴からして、『宿主』が関連している可能性が高い。加えて――」

「資金集めに重点を置いている組織、か。関連はありそうだな。だがどうする？　流石に全員を護衛することはできないが」

「それは策がある。彼らの持つ生徒証に小型の発信機を取り付ける。彼らの内、動きのおかしい者だけを追えばいい」

要は囮捜査だ。生徒を囮とし、事態が発生した際に収集に乗り出す。後手に回らざるを得ないことは変わらないが、警察よりははるかに早く動くことができる。シュンたちの入塾は彼ら自身も囮になるためだ。夏休みのこの期間、彼らが拘束される時間が最も長いの

が塾であるため、彼らもそこで待機することが最も望ましい。昼休みの時間中にことが起きる可能性もある。

「それと、シュン。君は依頼主（クライアント）に会いに行ってくれ。なんでも、直接話があるらしい」

「誰からだ？」

「警視総監だ。知り合いだと聞いたが？」

「ああ、なるほど。ところで、リョウ。レンはどうした？」

「さあ？　なんか用事でもあんじゃないのか？　電話が通じなくてさ」

彼に連絡が取れないことはそう珍しいことではない。彼もそれなりに零番街の諸事で忙しい。

再び文庫本の上で視線を滑らせ始めたリョウは、興味がなさそうに肩をすくめた。

そんなリョウにため息をつくと、シュンははいってきた時とは反対側の扉を開けた。

出て行こうとするシュンの背中に、リョウが思い出したように疑問を投げた。

「なあ、今日お前が持ってきてた写真って、お前が実際にやったやつか？」

シュンはリョウの問いに立ち止まり、その疑問を否定した。

「いや。『拷問屋』から買った。拷問ってのはやるほうも疲れるからな。出来るだけやりたくないんだよ」

シュンはそう答えながら肩越しに、眼帯をした目をリョウに向け

て薄く笑うと、扉を閉めた。

▼

一定間隔で並ぶ十字路に結ばれた直線の道が続き、左右に二階建て程度の住宅が並ぶ。脇を見やれば芝に水を撒く男性や、子供たちが走り回って遊ぶ様子を見ることができる。高級とはいえないまでも、中の上程度の所得を確保した、中流階級の住宅街を一人、異質な人影が歩いていた。

治療用の白い眼帯に付け替えてはいるが、やはりその雰囲気を完全に隠すことはできない。彼が通った瞬間、その付近の空気が冷める。

冷めた空気を周囲に撒きながら、シュンは目的の家にたどり着いた。

芝は青く刈られ、一階部分に設けられた車庫にはスズキの軽自動車が見える。クリーム色の外壁は落ち着いた雰囲気を見せ、ソーラーパネルを置いた屋根からは環境への配慮もうかがえる。

中央に設けられた歩道を進み、薄緑の扉の横に設けられたインターホンを押すと、間延びした音が平和に来客を知らせた。

「ガッ――！」

待ち構えていたかのような、脊椎反射的な反応速度で扉が開かれ、シュンの額との間で固い音をたてた。

「おっと、すまんな」

顔を見せた初老の男性が、シュンに悪びれた風もなく詫びた。

最近の似た出来事を思い出し、ため息をつく。手を上げて誠意のない詫びに答えながら、シュンは家主の導きに従って敷居を跨いだ。

フローリングの床を渡り、背中に付いて進む。無言のまま居間と思われる場所に通され、そこに置かれていたソファに腰掛ける。

退屈しのぎに簡単に部屋の中を見回す。木のテーブルが台所を区切る壁に備えつけられており、――料理を運ぶ距離を短くする工夫だろう――来客用と思われる対面に配置された革張りのソファ。他にもテレビに向いた大きめのソファが置かれ、窓際には観葉植物も見える。まるでモデルルームのような部屋の構成が、この家の幸福を垣間見せていた。

その間に先ほど扉を開けた初老の男性が、緑茶と羊羹（ようかん）を載せた盆を持って再び現れた。

黄土色のベストと灰色のスラックス。顔にはしわが刻まれ、頭には白髪が見える。しかしその視線は鋭く研ぎ澄まされ、のんびりとした家の雰囲気とは違う職場を持つことが窺える。

男性が盆を小卓に置き、ソファに深々と腰かけたところでシュンが口を開いた。

「久しぶりですね。順調ですか」

「順調なら、君たちに頼むこともないのだがな」

男性の凛とした言葉を聞きながら、緑茶を一口すする。甘さすら感じるすっきりとした風味を味わい、羊羹を口に放り込むと、小豆の香りが口腔に漂った。

「久々ですが、どうしたんですか？　まさか、彼女たちが標的だと？」

「まさにその通りだ」

肩をすくめながら投げた問いが、予想外の重さと共に打ち返された。シュンの目が細く、鋭く研がれる。

「要件を聞きましょうか」

9　情報（後書き）

もう、一週間のごとの投稿なんて言ってた時期が懐かしいですね。一応受験が存在しないので他の方に比べれば楽なはずなんですが……なんといっても書くのが遅いもので。まあ、今後もがんばります。

それと、前回の反省でもあったのですが、キャラが多い……。読者の皆様に負担をかけないようにしたいのですが、難しいですね。本当に。

10　囮捜査

「つまりXの二乗は3Y＋bと等しくなるため――」

塾の講師が黒板に白墨を擦りつけ、文字を刻んでいく。黒板に書かれた数式をノートに写し取りながら、横で突っ伏すリョウに目をやる。

腕の隙間からは滴るよだれが水たまりを作っている様子がうかがえる。この授業は一種のであるため真面目に受ける必要もないのだが、あまり寝てばかりいるのも問題がある気がする。

「佐々木！　いつまで寝ているつもりだ！」

問題を解かせている間に講師が通路を回り、ついでにリョウ――佐々木という名前にしている――を文字通り叩き起こす。リョウは自身の造り出した池の中に顔面を突っ込み、糸を引きながら起き上った。

「あれ？　シュン、もう授業終わったのか？」
「いや、まだ七分ある」
「あ、そう。おやすみ」

寝ぼけ眼のままシュンを振り向き、シュンの無愛想な返事と共に再度倒れこむ。

様子を見守っていた講師はため息をつくと、あきらめたらしく首を振りながら離れて行った。

この生活を始めて四日。今までの自由奔放な生活も魅力的ではあるが、「普通」と言うのも案外悪くはなかった。とはいっても、その『普通』も太陽の出ているうちだけなわけだが。

＊

「つまり、愉快犯ですか」

なんでも、警視総監――三島貞行――の元へ犯行予告が届いたらしい。

「そうだ。今までの事件以前にこのような予告が届いたことはない。それを今回になって私に送りつけてきたということは、挑発以外の何物でもない」

三島は膝に肘を置き、両手の指先を合わせた。万人のする動作ではあるが、彼の場合には怒りを表していることを、シュンは知っていた。

この三島という男、現在ではデスクワークが主だが、鬼と呼ばれる程の敏腕刑事だったそうだ。その頃の血が騒ぐのか、今回のような挑戦を受けた場合――現役時代の彼に対する復讐が主だが――や難事件が発生した場合には、必ずそれを事件発生から一週間ほどで解決している。検挙率の上昇が彼の功績として世間一般に認知されることではないが、一部の人間には有名な話だ。

ちなみに、その際に囮捜査の囮として使われるのがシュンやリョウであったりもする。部下を危険にさらしたくないのは人情らしい。その分彼らの犯罪が大目に見られることもあるため、文句ばかりも言っていられないのだが。

「個人宛てとは言え、間接的に警察に挑戦状を送りつけてきた。つまりある程度力を付けたため、周囲に組織の力を示そうとする可能性があり、何か新しい、目立つ手法をとってくる可能性がある。だから貴方の養子の双子と他の塾生を護れと。そんなとこでしょうか

？」

裏の世界は信用がものを言う。ハッカー達の力試しにアメリカ国防総省が集中的に狙われるように、裏社会の新興勢力がその国の警察組織を挑発、愉快犯的に犯罪を実行し、実力を示そうとすることもある。そのような犯罪が表面化しないのは、基本的に隠匿される――それほど大きな事態にはならないため――ためだ。

実際思慮の浅い連中がやる、という意味ではネット上で殺人予告をすることと大差なく、それが本人たちの望み通りの結果を生むことは限りなくゼロに近い。しかし――。

「そうだ。今まで通りなら君たちに頼むほどのことでもないのだが……、『宿主』の存在は我々にも大きな影響を与えているということだ」

「了解しました。塾の諸経費はそちらにお願いしてよろしいですね？　では――」

＊

授業内容を適度に聞き逃し、一日の授業を終えると時刻は夕方。シュン達の仕事はここからが本番となる。

塾の前に停められたテレビ局の取材車のような外見をした車の荷台部分。その内部で二人の少年が並べられたモニターを眺めていた。

「リョウ、一三番の画面が映ってないぞ」

「ああ、ちょっとまった……ほいっ、と」

車内のモニターに光が通い、表示された地図上に無数の赤い点を映し出す。それらはゆっくり駅に向かっていき、それぞれの方向へ移動していった。

画面のサイズを切り替え、離れていく点に視線を配る。それぞれの家へ無事帰り着いたことを確認し、全ての点が動きを止めた時点で画面の電源を落としていく。
結局、この日もそれまでと同様、平和に全ての電源を切ると、リョウは背もたれにか全体重を預けた。

「ふう、やっと今日も――」
「残念だが、終わってないぞ」

その言葉にリョウがゲンナリと振り向くと、シュンの見つめる先、未だ電源の入れられた画面が一つ。四つの点がまとまって存在し、モニターの地図がこの付近にいることを示している。

「この位置からすると、この近くにあるカラオケだな」
「じゃあ、そこまで移動するか？　近いほうが都合がいいだろ？」
「『カラオケで歌いたい』って顔面で語ってるぞ、お前」

リョウの顔が僅かな笑みを残して引きつった。表情を隠していたつもりだったのだが、シュンの観察力の前には徒労に過ぎなかったようだ。

「まあ、いいけどな」

シュンは肩をすくめて小さくそう言うと、運転席に体を滑り込ませ、エンジンをかけた。細い道で車体の方向を変え、大通りに出る。
流れる乗用車の列に、大きな車体を割り込ませ、残りの塾生が立ち寄ったカラオケの前にのっそりと停車させる。カラオケの看板は夜の闇に精いっぱい抗い、異様な眩しさを周囲に発散していた。

「悪いがお前一人で行ってくれ。俺は本でも読みながら見張っ――」

言いながら振り向いて、シュンの言葉はそこで終わった。彼の視線の先では開かれたドアと、車内に侵入しつつある夜気だけだった。

「加速装置でもついてんのか、あいつ」

妙な感動を覚えつつ、後部へ移動する。唯一点灯している画面の前に陣取り、持ち歩いている本を開いた。

一時間後。固まっていた四つの点が動き出し、カラオケから駅へと向かい始める。

リョウはまだ戻ってこない。シュンは本を閉じ、再び画面の監視を始める。

電車の向きに沿って点は移動していき、各駅に散っていく。

最後の点が駅に降り、ゆっくりと移動を始めた。

「うん？」

それまで背もたれに寄りかかっていたシュンが姿勢を正す。赤い点が再度、電車に乗っていた時と同じような速度で移動を始めたのだ。自動車に乗ったのだろうが、まさか学生がタクシーを使うとは思えない。親の車に拾われた可能性も考えたが、本来曲がるべき地点を通り過ぎ、別方向へ離れていく。

それだけ確認するとシュンは画面を運転席に駆け込み、ハンドルをとる。エンジンをかけながら手元の画面の電源を入れ、徐々に渋滞を始める大通りを避け、わき道に入る。

対面でギリギリすれ違える程度の道を、法定速度無視で走り抜ける。曲がり角では事前にクラクションを鳴らしながら、速度を緩めることなく通過する。

爆走するライトバンに驚いた猫が慌てて塀を飛び降り、現実世界に引き戻された赤子が泣き声を上げた。

ささやかな公害をまき散らしながら裏道に一筋の線を残し、再び大通りに戻ると同時に速度を落とす。
この時間帯ではあまり無茶な運転をするわけにはいかなかった。他の乗用車や業務用車がひしめいていることももちろんだが、警察と遊んでいる時間はない。
車の間を縫いながら、赤い点が移動する先を確認する。
移動の方向や、必要と考えられる施設を考えると――従来の手法を使うと仮定すれば、多少音が響いても外部に漏れにくい場所の必要がある――どうやら臨海部の廃工場に向かっているらしい。以前は重工業を行っていた施設は敷地も広く、隠れる場所も多い。人が近づくこともまずないと、条件はそろっている。
しばらく車を走らせ、目的地まで残り数キロという地点で再度画面を確認する。赤い点はやはり廃工場の中で止まっていた。
工場の一キロ程前で車を止め、装備を整える。銃、ナイフ、刀そして送られてきたモノと弾丸。それらの装備を所定の場所に収めていくと、最後に見覚えのないなにかが残った。
手触りは絹のようでもあり、革製品のようでもある。持ち上げると大した重量もなく、手から溢れて柔らかく流れるように滑り落ちた。
完全に持ち上げると、その下に紙が置かれているのが見えた。
拾い上げると、達筆な文字で『新型の防弾チョッキだと考えてくれ。デザインは以前のものと同じにしてある』と書かれている。予想はしていたが、銀が入れたものらしい。
改めて広げると、シュンが以前着ていたロングコートと同じデザインのようだ。
数秒間眺めてから、シュンは袖を通した。重量まで以前と同じ、というわけにはいかないが、元が軽いため、気にならない。
「行くか」

新たな装備にも期待も不安もなく、自分に向けてそう呟くその声は深い落ちつきを含んでいた。
近くのパーキングに車を入れ、そこからは歩いて行くことにする。工場へ直接乗りつけることも可能だが、やはり隠密行動をするに越したことはない。被害者には悪いが、死ななければ依頼に反したことにはならない。最後まで囮の役目を果たしてもらうとしよう。
些か正義感に欠ける思考を展開しながら、シュンは工場にたどり着いた。大きなパイプが夜空にうねり、大蛇が幾ひきも絡まっているように見える。それを閉じ込めるかのようなフェンスが、非力に周囲を取り巻いていた。

「さて、と」

左右を見回してから右に回りこみ、適当な位置で足を止める。背負った刀を鞘から抜き放ち、上段に構えると、無言の気合と共に垂直に振り下ろす。
振り下ろした状態で瞬間動きを止め、刀を鞘に収めると、何事もなかったかのように今しがた作成したフェンスの切れ目を押し広げ侵入する。
倉庫の陰に隠れながら移動し、工場へ近づいていく。
どこから侵入しようかと考えていると、梯子が取り付けられている場所があった。外部のパイプの検査か何かに用いるものらしい。
頭よりもやや高い位置にある梯子に手をかけ、懸垂の要領で体を持ち上げる。登っていく途中にある通路に乗り移り、手近にあった扉に手をかけるが、当然鍵がかかっていた。
シュンは焦らずにナイフを一本引き抜く。刀身にはなにやら溝が掘られ、柄にはひも状のものが巻きつけられている。
それを先ほどの刀と同じように上段に――しかし片手で――構え、扉の隙間に向けて振り下ろす。
金属音が響き、途中で刃が止まった。引き抜き、再度振り下ろす

と、金属音と共に鍵を切断した。
本来、鉄二から受け継いだ技術ならば刀を使おうとナイフを使おうと、この程度の金属ならば豆腐と大差ないはずなのだが――。
「……まだ、不完全か」
刃こぼれ一つない刃を見つめ、ため息をつくように呟くと、シュンは扉を引き開けた。

１０　囮捜査（後書き）

投稿が遅れて申し訳ありません。テスト期間中だったもので。と言っても言うほど勉強しませんでしたが……。

どんな形であれ、必ず完結させますので、最後までお付き合い願えればうれしいです。

それと、ややいい加減なことを書いているかもしれませんので、鵜呑みにはしないでください。間違っている個所の指摘がある場合は、メッセージや感想にお願いします。

11　旧友（前書き）

今回、若干残酷描写が入りますので、苦手な方は念のためご注意ください。

11　旧友

内部は暗く、周囲を細かく観察することはできないが、大きな釜らしきものがあることから、鉄鋼関連の工場だったようだ。

ゆっくりと周囲を見回しながら、金属製の通路を歩く。周囲の気配を探るが、特に不審な気配は感じられない。静かに、ひっそりと闇を抱え込み眠る工場は犯しがたい、神聖さすら感じさせる静寂をたたえていた。

何も聞こえない、静寂。それが逆に、シュンの予感を確実なものへと煮詰めていった。

二階部分から階段を下り、足音を忍ばせ進む。その進行方向に、微かな光が漏れた。

扉の隙間から光が漏れ、僅かに床を照らしている。

慎重にドアに近づき、その光が照らす足元に目を向ける。そしてしゃがみ込むと、一枚のカードを拾い上げた。白いプラスチックの板に字が彫られている。それはシュンも持っている、発信機を取り付けた生徒証だった。

「はあ、……そんなに俺が邪魔かね？」

どうやら一杯食わされたらしい。恐らく、電車内で財布ごと生徒証を盗み、どこかで打ち合わせていた仲間の車に乗ったのだろう。それは、誰かが塾生を見張っていたことを知っていたということになる。警察が内部情報を漏らすとは考えにくい。他に情報が漏れる可能性といえば――。

「仲間内の誰か、ってとこか。まったく、面倒な」

呟いてため息をつくと再度立ち上がり、目の前の扉を引き開けた。

暗がりに光があふれ、しばしの間シュンの視力を奪った。
視力が回復し、まず視界に飛び込んできたのは巨大な部屋。以前は大型機械でもおかれていたのか、壁際にはコードなどが散乱している。
そしてその次に彼の目が捉えた、不快極まりない人物の顔。銀よりも、さらに性質（たち）の悪い奴の顔。

「よーぉ！　久しぶりだなぁ、シューン？」
「本当にな。出来れば二度と会いたくなかったが」
「おおっとぉ、そりゃあ悪いことしたなぁ。俺だって手前ぇの顔なんぞ二度と見たかなかったんだがよぉ、仕事じゃしゃあねえだろぉ？」

妙に間延びした口調で話す目前の少年。全体的にほっそりとした輪郭で、うすら笑いを浮かべた顔には未だニキビが残っている。ジーンズを腰ばきに履き、パンクファッションをまねた格好の少年。彼の名は、カズ。以前、シュンが零番街から追い出した一人だ。
零番街が現在の状態になったのは比較的最近のことだ。以前の、無法地帯的印象はぬぐえていないが、確実に治安は安定した。それはシュンがそうなるように動いたからだが、その「まとも化」の過程で幾人か――零番街に悪影響を及ぼす――追い出したのだ。
協調性のない者や、他者を攻撃する者。そう言った追い出された連中の一人、それがカズだった。

「手前ぇの顔見てても不快なだけだわ。じゃあ、死ね」

そう言って自分の顔を手でなで、自身の顔に生えるニキビを潰した。
彼のニキビが潰され、若者特有の過剰分泌された皮脂が押し出された。そして――シュンは神経が燃え上がるのを感じた。

痛みと言うには余りにも強すぎる、神経を直接刺激する感覚。しかもその痛みに場所の制限はない。手足から口、目玉、内臓に至るまで、痛覚の存在する部位全てが激烈な刺激を受け、脳を壊さんばかりに信号を送り続ける。人間であれば、理性など欠片もなく吹き飛ばされる、そんな感覚だった。だが――。

「なるほど、拷問役はお前か」

「おい、どうなってんだ？」

不快そうに首を傾げ、カズはもう一つニキビを潰した。ニキビを一つ潰すごとに神経に直接信号を割り込ませる、それが彼の能力だ。時たま、ニキビが十分に潰れず能力が発動しないこともあるが、発動すれば発狂するほどの激痛が全身を襲う。潰それにもかかわらず、シュンは相変わらず冷静に直立している。そして、笑った。

「俺は以前、痛みが日常だった期間がある。どうやら、その期間中に痛覚神経が壊れたらしい。痛みは感じるが、脊椎反射的なものはない。残念だったな」

未だ神経は脳に焼けつくような感覚を送り続けているものの、行動自体にはまったく問題ない。シュンは一歩ずつ、確かめるように歩みを進め、カズとの距離を縮めていく。

近づくシュンを睨みながら、カズが徐々に後退する。その顔に先ほどまでの嘲笑うような表情はない。

「くそったれ、あいつもつれてくりゃあ良かったぜ。しゃあねえ、今回は退くか。じゃあな」

「逃がすと思うか？」

長々と口上を述べ、懐から右手を抜いた途端、取り出したモノを

取り落とした。慌てて拾おうと身を屈めたところで、催涙手榴弾を握ったまま地に落ちる――自分の腕が目に移った。

「あれ？　え？　何だよ、これ？」

思考がパズルのピースのようにバラけ、まとまらない。おかしい。シュンの手に提げている刀にはまったく血が付いていない。それなのに自分の腕はコンクリートの上に赤い池を広げ始めている。切られた、そう気づいた途端、ようやく肉体が判断力を取り戻した。

「うわあああ！　いてぇ、いてえぇえ！　畜生、どうなってやがんだ！」

シュンは錯乱して大声を上げるカズに近づき、足払いをかけて転ばせた。

カズは右手をついて立ち上がろうとして、再度地に伏した。

シュンは再度立ち上がろうとするカズの腹を踏みつけ、地面に押し倒した。次いで懐から注射器を取り出し、針を装着した。

「モルヒネだ。本来仲間用だが、以前の仲間として情けぐらいはかけてやる」

傷口付近に注射し、一度引き抜いた針を今度は反対側の肘付近に突き刺す。その意味に気付いたカズは必死の形相で立ちあがり、躓いた。手を突つこうと腕を突き出し、顔面から突っ込んだ。

シュンは血の付着していない刀身を眺め、続いて床にまかれた血に視線を移すと、ため息をついた。

刀身に血が付いていないこと自体には問題ない。それこそがこの剣術の真髄、速度だ。血液や人体の脂肪分が付着しない程の超高速で刀を振り、対象を切るのだ。だが――。

「刀を止めた勢いで刀身の血も払えただけか。ふう、中々上手くいかないもんだ」
「くそったれ！　いてぇえ！　畜生！　なにしやがった、くそっ！」
「やかましい。ガチャガチャぬかすな。女か、お前は」

刀を鞘に収め、半ば錯乱して叫び続けるカズに歩み寄る。その背中を踏みつけて押さえると、内ポケットからひもを取り出した。
カズの腕を緊縛し、出血を止める。存命のための処置なのだろうが、その間悲鳴を上げ続けるカズを殴って気絶させたことから、どう考えても博愛精神からではない。

「もう一回人生やり直しな」
「どうやら約束は守っているらしいな」

工場の内部に存在しないはずの人物の声が響いた。鉄二と話していた人物と同一のその声を聞いた途端、シュンが肉体の緊張を解いた。
目を凝らして見れば、周囲を霧のような物が薄く満たしているのが分かる。その霧がするするとシュンの右手側の空間に集まり、人型を取った。
最初は輪郭すらはっきりしなかった人型は徐々にはっきりとした形を持ち、やがて一人の男性を作りだした。
ハンサムな、ラテン系を思わせる顔立ちはまるで病人のように白く、それに合わせるかのような白い髪をオールバックにまとめたその男性は、黒いマントに身を包み一見するとドラキュラの仮装を思わせる姿をしていた。

「貴方との約束を破ろうとするほど、俺も命知らずじゃありませんよ」

「随分と丸くなったな。とはいえ、博愛精神には未だ欠けるようだが」
「敵をあいつと同様に愛せ、と言われても無理があります」
「だろうな」

他愛のない会話を続けながら、男性が微苦笑を漏らした。シュンは肩をすくめ、彼の疑問を男に投げかけた。

「ところで伯爵、何の用ですか？　まさか、同窓会気分で俺の時化(しけ)た顔を見に来たわけでもないでしょう？」
「当たり前だ。要件を二つ。まず鉄二からの伝言だ。お前の剣術は未だ不完全だが、それは速度の問題ではない。日本刀の基本の使用法を良く考えろ、だそうだ。それと」

そこで一度言葉を切り、伯爵はシュンに見透かすような視線を向けた。ニタリ、と嫌味な笑みを浮かべると、言葉を続ける。

「お前の言う『あいつ』はこいつらの所属する組織とは別の組織に所属している。いづれ協力することになるだろう。安心したか？　精々、また死なないように頑張ることだ」

そう告げながら身を翻しシュンに背を向けたところで、その姿は先ほどと同様――いや、はるかに速く霧散した。

「まったく、どこまで見通してるんだか……いや、全部か」

自分の心理を直接覗かれているような感覚には、既に慣れた。
自分を自分以上に把握されているというのは不快でもあるが、今は安心感のほうが上回っていた。
仕事上とは言え、彼女と争うのはできれば避けたいところだ。ど

うせ決着など着かず、どちらも動けなくなるまでの茶番を演じるしかない。
伯爵に与えられた情報から浮かんだ思考を続けていると、ズボンのポケットの中に振動を感じた。取り出した携帯電話にはリョウの名が映し出されていた。

「もしもし？　どうした？　勝手に帰っていいぞ」
「いや、なんつーかさ……帰り道がわからねえ」
「とりあえず二万回ぐらい死んでくれないか？」

深々とため息をつき、返事を待たずに通話を終了する。
未だ気を失っているカズを肩に担ぎ、今度は正面から外に出る。人影に気を配りながら、車を止めたパーキングへ戻り、カズを後部座席に放り込むと、積んであった救急セットで応急処置を施す。
駐車料金の高さにあきれながら車を出し、リョウを迎えに数の減った車の列へ混じり先の通りまで戻る。
カラオケ屋の前で右往左往していたリョウを拾い、助手席に乗せて車を発進させる。大まかに先ほどの案件を説明しながら裏通りに角を曲がった。

「で？　そんだけか？　お前なめられてるんじゃねーの？」
「と言うより、あいつが一方的になめてた感じだったな。普通、神経に直接攻撃して通じないなんてありえないからな。ただ、気になるのは……」
「気になるのは？」
「『あいつも連れてくればよかった』って言ってたんだ。そうすると、あの場に仲間がいた可能性がある。そいつも対処しておいたほうが良かったかもな」
「まあ、いいんじゃん？　どうせ気付いた時には誰もいないわけだし」

リョウの意見を聞いた後も、何故か胸騒ぎのようなモノが残る。それは言葉では説明のつかない類のものだ。

「うん？　リョウ、サイドミラーで後ろを見てくれ」

「ああ、後ろからくっついてきてるやつか？　この一本道じゃ追ってるわけじゃあないだろ？　お前って自意識過剰？」

「二兆回死ね。そうじゃない。お前、運転手見えるか？」

思考を巡らせながら運転していたために気付くのが遅れたが、後方から一台の車が――車高からするとスポーツタイプらしい――近づいてきていた。道なりに一本道を進んでいるため追跡ではない可能性も高い。だが――。

「……いや、つーか乗ってないんじゃん？」

運転席に人がいない。よほど小柄なのか、それとも何らかの方法で身を隠しているのか。

バックミラーを覗きながら運転していたシュンの眉間にしわが寄った。

先ほどまで何も見えなかった助手席に人影が現れた。それはいいのだが、こちらに何かを向けている。

「メガホンか？　リョウ、なんて言ってるか聞き取れるか？」

「ああ、ちょっと待った……『ゴブリン』かな？」

リョウの言葉と同時にシュンの脳内へその姿が思い描かれる。伝説上の生物で地方によってその見た目は異なるが、主に醜悪な姿で描かれ、悪意を持った妖精であるとされ、棍棒を持っているとされることも多い。

そして――。

「おいおい、マジかよ！？」

伝説は現れた。

11　旧友（後書き）

中々上手くいかないものですね。今、少し長く書くよう意識して書いてるんですが、一階ごとに場面転換利用したほうが楽でいいかもしれません。

まあ、これも練習だとは思いますが。

次もできれば一週間以内に書きたいと思うので。

では――

１２　切られる者

緑がかった皮膚、醜悪な顔、背は低く小型の武器を携えて。
小鬼とも訳される、『ゴブリン』。
それも一体ではない。十数体、どこに隠れていたのかと思わせる程の集団が後方の車から湧きだし、自動車の走行速度より速く、こちらに向けて距離を縮めてくる。

「何かの能力らしいな。リョウ、運転を代われ。迎撃する」

リョウがハンドルをつかんだことを確認する。シュンはカズの転がっている後部へ移り、後方の扉を左右に開く。
扉を開け放つのと同時飛び込む緑の塊。それを反射的に右の裏拳で叩き落とし、車外へ蹴り落とす。同時に左手で銃を抜き、直後に続く一体へ銃撃。胸部に弾丸を受け、小鬼は背中から地面へ落下した。
蹴り、撃ち、殴る。シュンは波のように隙間なく押し寄せる小鬼の大軍をさばいてゆく。しかしおかしなことに、小鬼の数は一向に減る気配がない。

「リョウ、出来るだけ直線で走れ！」
「曲がるぞ！　もうじき高速道路がある。そいつに乗る！」

ワンテンポ早くハンドルを切り、曲がり角で９０度車体は向きを変え、アクセルとブレーキで強引に慣性を抑え込む。車体はスキール音を響かせながら大通りに滑り出し、再度前方へ加速を始める。

「ちっ！」

一時的に落ちた速度が同時に二体のゴブリンの侵入を許した。一体はその足が床に着く前に蹴り落とし、続けてもう一体の顔面を蹴り飛ばす。だがこちらは上半身が大きく傾いただけで車内にとどまっていた。その手は、カズの足首をしっかりと握りしめている。
シュンが銃の照準を合わせる直前、小鬼はカズの足を引いて車外へと飛び降りると、後方に迫っていたスポーツカーへと乗り込んだ。その体から出たとは思えない膂力だ。

「逃がすか」

銃が運転席の人影へ向けられ、その引き金が絞られる瞬間、重い音が車内に響く。

「ちっ！」

車内に放り込まれた手榴弾が轟音と共に炸裂し、車内にその破片を大量に撒き散らす。殺傷用のその破片は散弾を撃つように狭い車内を蹂躙した。
シュンは咄嗟に急所をかばいながらも、それが無駄だとはっきりと自覚していた。だが――。
肉体が貫かれる痛みを感じることはなかった。爆音によって一時的に奪われた聴覚が徐々に戻り、それについて走行音が耳に届き始める。

「リョウ、無事か」

答えはない。しかし、安定したうなりを響かせる走行音が彼の無事を示していた。
先ほどの車はどこに行ったのか、ゴブリン達も後方にその姿は見えない。前方を確認するために運転席へと向かうと、足音に気付い

たリョウがこちらを振り向いた。

「おとぎの国はまだまだ続きまーす、と」

軽い口調とは裏腹にその口元は引きつり、顔は青ざめている。

シュンの目がその直後に捉えた情報は二つ。一つはフロントガラスに張り付いている紙。そこには一つ目の巨人、サイクロプスの絵が印刷されている。そしてもう一つ。１００ｍほど前方に先のスポーツカーが見え、その上に――巨人が乗っていた。

その姿は言うまでもない。細部は見えないが３ｍ近い巨体と顔面に光る巨大な球体、大木にも引けを取らない腕や足はどう考えても現存の生物の範疇を逸脱していた。

「退屈しねえな、まったく」

シュンは小さく呟き、踵を返した。

車内を駆け抜け、開け放していた扉の上部をつかみ外部へと身を躍らせる。

逆上がりの要領で屋根の上に体を持ち上げ、進行方向から吹き付ける風の抵抗を身を低くして避けながら、運転席側へと向かう。

そして、コートの中からそれを取り出した。二つ折りにされた長大な銃身は、銃の基本構造のみを巨大化したかのような無骨な印象を受ける。二つ折りにされたその銃身を伸ばし、二脚を設置する。コッキングレバーを操作し薬室（チャンバー）を開き、そこに１４，５ｍｍ弾を装填する。再度薬室を閉じ、その砲口を巨人へと向ける

「さて、試し撃ちをさせてもらおうか」

その言葉に反応したかのように巨人は咆哮を発し、道路へと踏み出した。その巨体の踏み出す一歩は軽く１０ｍを越え、こちらの進

行速度と相まって瞬く間に距離を縮める。
緊張によって引き延ばされた異様に長い一瞬、シュンは確かにその顔を歓喜に歪めた。
そして――轟音。
先ほどの咆哮を上回る巨大な音の塊が大気を震わせた。音速の二倍以上で撃ちだされた弾丸は大気を貫き、自身の発した音の壁を破る。そして――着弾。
弾丸は巨人の首の下部に着弾し、頸椎を破壊。貫通した弾丸はサイクロプスの背面を大きくえぐり取り、入射口の数倍の穴を作りだした。血を流すことも、肉体を破壊された不快な音を響かせることもなく、眼前に迫っていた巨人は蜃気楼のように消え失せ、跡形もなかった。

「問題はないな……だが、逃げられたな」

黒いカラーリングのスポーツカーも巨人同様、彼らの眼前から消え失せていた。
長大な銃身を折りたたみ、再度コートの内側へしまいながら屋根を伝い、車内へ戻る。
助手席にシュンが座るなり、リョウが声をかけた。

「なにぶっ放したんだ、一体？」
「改造型のデグチャレフＰＴＲＤ１９４１、大戦中のソ連の対戦車ライフルだ。つっても、現代の戦車の装甲は貫けないからアンチマテリアルライフルなんて呼ばれてるがな」
「対戦車ライフルかよ。なんてもん持ち歩いてんだ……つーか街中でそんなもん撃つなよ」

確かに、スタミナの少ないシュンが無駄な装備を――対戦車ライフルなどは特に――することは行動可能時間を短くする要因となり、

好ましくない。

「いや、能力の関係上少し重くないと都合が悪いんでね」

「……お前って『宿主』？」

「一応な。使い勝手が悪すぎてほとんど使えないんだが。ただ、デフォルトで必要に応じた身体能力の向上がある。瞬間的に力を発する時には、多少重くないと足が滑る時があるんでな時があるんでな。ちなみに、スタミナも代償の一つだよ」

肩をすくめながら言うシュンの横顔が、リョウの目にはいつも以上に人間離れして映った。

▼

零番街の夜は暗い。以前の治安の名残か街灯はことごとく割られ、明りはついていない。家々に灯る明りも節約のために必要最低限、さらに点在する廃屋がその光の道を細切れに分断している。加えて、未だにぬぐえない『不良の街』というイメージは人々を遠ざけ、夜ともなれば街は人の温かみからもかけ離れ、ゴーストタウンのような様相を呈する。こんな街を夜更けに出歩くのはせいぜいが動物や通過する自動車、バイト帰りの住人達だけだった。

そんな闇に包まれた零番街の一角。零番街と他の町の境に位置する家の前に、リョウはワゴン車を止めた。すると、こちらに向かって歩いてくる影が一つ。

その影に対し、シュンは反射的にナイフを引き抜いた。

この周囲に住む全員が彼の知り合いだとは言え、こんな真夜中まで外にいる人間はあまり信用したくない。

しかし、その黒いスーツ姿がヘッドライトの明かりを受けるにつれて、その緊張は緩んでいった。

「何やってんだよ、こんな時間に」

近づいてくる銀に対し、リョウがいぶかしげに声をかけた。

突発的に起きた先ほどの『事件』に対し、彼がこちらを待ち受けていたとは思えない。

となれば――。

「悪い予感しかしないな」

ため息をつくような口調でシュンが肩をすくめ、改めて銀に目を向ける。リョウのア川の――運転席側の――ドアに近づいてきた銀は視線によってもたらされた催促を受け、銀が重そうな口をゆっくりと開く。

「良いニュースと悪いニュース、どちらから聞きたい？」

「お約束なら良いほうからだろ」

リョウの気楽な調子が、銀の苦笑を誘った。そして首を振りながら最初のニュースを口にする。

「別の組織から停戦の申し入れがあった。利害が一致すれば協力も望めるだろう」

停戦協定は実は相当に珍しい。本来『裏』とは生き馬の目を抜く世界。本来ならばなあ良く手を結ぶよりも後ろから相手を刺すことを狙うのだ。そんな業界で停戦の申し入れを積極的に呼びかけていきたということは相手にする勢力が許容範囲を超えるほど強大だということを意味する。

「で、続いての悪いニュースは？」

軽い調子で、悪い知らせをむしろ楽しむかのようにリョウが問う。そんなリョウとは対照的にシュンはその隻眼を細く、鋭く研いだ。自身の内にある予感が実現しないことを望みながら銀の言葉を待つ。

「レンが消えた。ミリガンもだ。裏切りの可能性が高い」

空気が凍りついた。

数秒の間をおいて融けていく空気が徐々に判断力をも取り戻させる。

「嘘……だろ……？」

静かに眠る街の中に、リョウの言葉はむなしく吸い込まれていった。

12　切られる者（後書き）

ここで一章は終わりです。ちなみに、「サイクロプス」って実は下級の神様らしいです。調べていて初めて知りました。化け物の印象が強いんですが、私だけでしょうか？

現在、高校三年も終わりに近づいてきていますが、受験のために更新が止まることはありません。付属校なんで。とは言っても、この前みたいに試験で遅れることはあるかもしれませんが。

では、出来れば今後もお付き合い願えればと思います。では――

13　対面

――これは、夢。

そう分かっていながら、手を伸ばさずにはいられない。

そして結果も知っている。いくら腕を伸ばしても、この手は彼女には届かない。

それでも、手を伸ばす。もっと、もっと、もっ――。

鈍器で何かを殴ったかのような鈍い音と共に激しい痛みが肩口に走り、浅い位置をうろついていた意識が強制的に現実の側へと押し出された。

呻きながら体を起こすと、手近な柱に肩をぶつけて抜けた肩をはめなおす。

左手にはめたままの腕時計に目を向けると、現在は午前五時半。大抵の職業であれば未だ夢の続きを楽しんでいてもいい時間だった。――自分が『大抵の職業』の内の一つを生業にしているとは言い難いが。

空はまだ夜の色を残し、窓から見える景色も薄暗い。人通りも全く――いや、いた。

静かな町の中で、ペタペタとおかしな足音が響いている。足音はこちらに向かって近づき、本体を現した。

「……若葉か」

おかしな足音の主、若葉はランニングの速度を維持したまま敷地に入った。そのまま動きを止めることなくシャドウボクシングを始めた。

再び体を布団に横たえ、一時間ほど寝返りをうちながら寝ようと試みる。しかし、まだ疼く肩を無視して眠るには余りにも目がさえていた。あきらめて体を起こし、再度窓から下を覗く。そこには、

未だに動きが鈍ることもなく激しい動きを続けている若葉がいた。
尋常ではないスタミナだった。

「……行ってみるか」

何とはなしに思いついた考えを呟く。今更眠ったとしても大した違いはないだろう。それならばその動きを眺めるなり、運動がてら彼女と手合わせしてみるのも面白いかもしれない。気の変わらないうちに着替えを済ませ、ちゃぶ台の上に置かれていた眼帯をはめ、必要のない眼鏡をかける。

鍵を開け、薄いドアを開いて外に出る。陽が昇ってすぐとはいえ、今の季節では寒さなどまるで感じない。むしろ、この時間帯からすれば暑すぎるとさえ言えた。

階段を下り、アパートの敷地内にある猫の額ほどの庭に入る。そこには縦横無尽に飛び回りながら攻撃を繰り出し続ける若葉の姿があった。

短く生えた雑草を踏みながら近づき、背後から声をかける。

「おーい、若――」
「はぁっ！」

声をかけた瞬間、シュンの顔面に若葉の横なぎの裏拳が放たれた。振り向きざまの一撃を反射的に右手で受け、続く顔面への左アッパーは体を後方に反らしてかわす。そのまま体を起こすことなく後方へ回転。若葉の顎へ蹴り上げる。

だが――浅い。

体勢を立てなおす前に若葉の右回し蹴りが迫り、肘で迎撃。蹴られた勢いを利用して転がり、痛みに若葉の動きの鈍っている間に体勢を立て直す。

次の攻撃を見越して構えをとる。だが――。

「あいたたた……あれ？　シュンさん、どうしたんですか？　こんなに早く」
「いや、窓からお前が走ってるのを見かけてな」
「あの……何かしませんでした？」

まさかとは思うが覚えていない、などと言うのか。漫画のような事態に少々の間を置き、口を開く

「……なかなか鋭い攻撃だった」
「す、すみません！　私修練してる最中は取りあえず動くものを攻撃する癖が……」

勢いよく頭を下げる若葉の頭部を見つめながら、シュンはため息をついた。
確かに背後から声をかけた自分にも非はあろうが、一般人には使ってほしくない威力だった。恐らく、その危険性を減らすためにこの時間に行っているのだろう。
しかし、それを――一般人に被害をもたらす危険性を考慮しなければ、彼女の技量は相当に高いと言える。彼女と素手で立ち会えば敗けるのはこちらだろう。

「まさかとは思うが、お前我流か？　その拳法」
「いえ、父さんに習いました」

『父さん』と言うのは以前にも聞いた、施設の管理者だろう。一定の条件さえ合致すれば施設の管理者となるのに職業などの制限はないため、元軍人だろうが政治家だろうがなることは可能だが、孤児たちに格闘技を教えると言うのは暴漢対策だろうか。少々やりすぎな気もするが。

勝手な想像を巡らせていると、階段を下りる軽快な音が響いた。階段のほうを見やると、鈴音がこちらに向かって来る。

「シュンさん、おはようございます。若葉、どうしたの？　もしかしてシュンさんに攻撃したんじゃ……」

「いえ、全然大丈夫です」

なにが大丈夫なのかまるで分らないのだが、若葉はにこやかに返事をする。そんな若葉に鈴音はため息をつき、続いてシュンのほうに振り向き、謝罪する。

「本当にすみません。それにしてもシュンさんって強いんですね、無傷だなんて。骨折した人もいたんですけど」

「そうでもないけどな。まさかとは思うが、お前も強いのか？」

「いえ、そんなことありません。若葉だけですよ。私も一般の方一人ぐらいなら相手に出来ますけど」

目が見えないのに一般人と同等とは。――漫画かよ、シュンは内心で呟きながら二人の少女の顔を見比べた。

「……お前ら、朝飯はどうする？　なんだったら、俺の部屋で食べるか？」

「良いんですか？　早く、行きましょう！」

鈴音の言葉を待つことなく、若葉はシュンの部屋へ向けて走り出した。階段を上る音に混じって、腹の虫がなく音がはかなく響いてくる。

シュンと鈴音は顔を見合わせると、笑いながら若葉の後を追った。

鈴音を連れて自室に戻り、冷蔵庫を開く。中に残っている白身魚と野菜、豆腐を取り出し、メニューを考える。

湯を沸騰させ、その中にニンジンの輪切りを放りこむ。続いて大根、里芋を放り込みふたを閉じる。
野菜を煮込んでいる間に魚から水分を拭う。小麦粉を付けた後に卵に付けパン粉をまぶし、温めておいた油の中にそっと置くように入れると、弾けるような音と共に油が跳ねあがった。
煮込んでいた鍋の火を弱め、ふたを開けると白い湯気がきのこ雲のように盛り上がる。最後に味噌と豆腐を加え、豆腐が温まるまで火にかける。
出来あがったメニューは白身魚のフライと豚汁。温まった白米とソースが運ばれ、それぞれの前に箸をおいて挨拶。
各々箸を手に取り、料理に手をつけた。
シュンは豚汁をすすりながら二人の動きを観察する。食事一つするにしても、この二人は性格の差が出ていた。
若葉は魚のフライに最初から全体にソースをかけ、食べ始めた。対する鈴音は一口白身魚を口に含み、その後部分的にソースをかけている。
二人の性格観察をしながらふとカレンダーに目をやると、今日は既に八月二十日。夏休みもそろそろ終わりが見え始めている。となれば聞きたくなることは一つ。

「お前ら、夏休みに宿題ってあんのか？」
「はい。終わってますよ。二日目に」
「私は昨日終わりました。若葉に読みあげてもらっていたので少し余分に時間がかかりましたけど」

やはりこの点でも性格の差が如実に表れている。本音では若葉の宿題が終わっていることに心底驚いたのだが。それはさておき――。
シュンは二人よりも一足先に食べ終わり、流しに食器を運んだ。そしてそのまま玄関へと向かう。

「食器は食べ終わったら水に漬けておけよ。俺はちょいと出かける」
「行ってらっしゃ～い」
「出るときは鍵閉めろよ」

最後に一言残し、シュンは扉を閉めた。少々勢いよく閉めすぎたのか、薄い壁が抗議するように震えた。
時計を覗くと午前八時。些か早いが、多少早くとも問題はないだろう。
『おとぎの国』の事件の後一週間目の一昨日の晩、銀から電話がかかってきた。先日停戦を申し込んできた組織、彼らから顔合わせの申し入れがあった。どうやら「協力時の同志討ちを防ぐ」という名目のようだが、実際はこちらの戦力確認だろう。
このような呼び出しをうけた場合、罠である可能性も大いに考えられる。それ故、会合を受けた場合でも大抵の人間は自分を援護出来る人間を会合の周囲に紛れ込ませるのだが、堅気ではない人間というのは見る人間が見ればすぐにそれと分かるものだ。
つまり、これは単なる顔合わせではなく、相手方の人数の把握の意味合いがあるのだ。となれば、相手方に軽く見られるようなことは避けたい。
最も簡単に相手を威圧するならば、人数を集めればいい。そこでシュンがとった方法は、零番街の住人への協力要請だった。
純粋な堅気ではなく、人数を確保する。零番街はその両方に合致する上、全員の顔を把握しているため区別がつきやすいという利点もあった。
時間としては早いが、地形の確認の意味でも先に目的地についておく必要はある。他のメンバーは時間に合わせて順次集合するように指示している。最初に行くよう指示したリョウのグループはもう到着しているころだろう。
考えながら駅までの道のりを歩き、地下鉄に乗って二十五分。日比谷駅で下車し、日比谷公園へと向かう。外周を一周した後公園に

到着すると、時刻は九時を少し回ったあたりだった。
休日ではあるがまだ時間が早いせいか人通りは少なく、あまり良い状態とは言えない。周囲に目を配りながら公園を歩いて行くと、音楽が耳に触れた。
ギターやドラムの生み出す激しいテンポの連続が全身に爽快感を送りつけ、鳥肌の立つような感覚が通り抜ける。
その巧みな演奏は歌詞も何も必要なく直接魂に語りかけ、血液を沸騰させる。
歩いて行くと路上ライブらしく、公園内に一か所人だかりができていた。人数が少なかったのはどうやらここに集まっていたためらしい。
一曲の演奏が終わり、大きな拍手が送られる。シュンは拍手を送る人垣の頭上から奏者を覗こうと跳び上がり、着地と同時に額に手を当て長々とため息をついた。
――リョウだった。
確かに目立つなとは言っていない。だが、状況を把握する程度の常識は期待したかった。
拍手が途切れたのと同時にリョウは再び演奏を始める。
リョウのもつ音楽関連の才能は零番街に住む大抵の人間が知っている。裏から決別した後、彼が生計を立てられたのはこの才能故なのだ。
今更どうすることもできないと諦め、シュンは奏でられる音楽を聴きながらポケットに入れてあった文庫本を取り出した。
――午前十二時数分前。文庫本を半分ほど読み終わった時点でふと顔を上げると、周囲の人通りは先ほどとは比較できないほどに――零番街の人間もそこかしこに見える――増えていた。リョウの演奏は相変わらず続き、群衆――というよりカップルの集団は先ほど同様彼らの周囲を保護するように肉の壁を展開している。道往く人々は音楽に耳を傾け、歩みを遅くはするものの、人垣の厚さを目にするとそのまま歩調を戻して歩み去っていく。

再び文庫本へと視線を落そうと僅かに首を傾げる。途端に、座っていたベンチが軋んだ。公共のベンチなのだから誰か他人が座ることもあろう、そう考えつつ視線のみ横の人物へと向ける。

背中の中ほどまで伸ばされた黒髪が細くなめらかに風に揺れている。袖から覗く腕もベンチにのせられた指も、色白で細く、その滑らかさは職人が大理石から造り出した彫像を思わせた。

シュンの視線に気づいたのか、彼女は血色のよい横顔を彼のほうに向けた。柔らかな曲線を描いた瞳がシュンの視線に重なる。そして、彼女は左目を覆う眼帯の存在を感じさせない、柔らかい笑みを浮かべた。

「久しぶり、シュン君」

13　対面（後書き）

大分更新が遅れて申し訳ありません。正直、燃え尽きてました。いや、文化祭で。

さて、文化祭が終わって落ち着いたかと思うと既に定期試験の一週間前。

また更新が遅れるとは思いますがなにとぞご容赦を。

14　裏

「久しぶり、シュン君」

その声と共に風に乗って流れてきた芳香が鼻孔をくすぐり、脳内で記憶のかけらが明滅した。

柔らかな笑みを浮かべる顔に視線を合わせると、こちらも自然と顔が緩んだ。

「警戒の必要はなかったか」

「いきなり襲いかかるかもよ？」

悪戯っぽく笑う顔を横目に緊張を解き、開いていた文庫本を閉じ、ベンチの上に置くと組んだ膝の上に肘を置き、手のひらで頭を支える。双方正面を向き直り、静かに言葉を交わす。

「二年と三カ月かな？　最後に会ってから」

「正確には二年と三カ月と四日と……二時間八分だな」

「男が細かいことにこだわるとモテないよ？」

くすくすと笑う少女に対し、シュンは肩をすくめる。

「今更モテる必要もないさ。さて？　まさか、本当に顔合わせだけってことはないんだろ？」

本当に同志討ちを避けるための確認であるのならば写真でも事足りる。戦力確認だったとしても、零番街の人間が多すぎるこの中では正確な戦力は把握できず、目的が達成できないのならば長居する必要はない。――彼女の場合は必ずしも当てはまるわけではないだ

ろうが。

「一応『絵師』の情報を引き出せ、とは言われたけどね。そんなに分かってることがないんじゃないかな、って思って」

今度は少女が肩をすくめて見せる。シュンの方を振り向き、怪訝な顔をしているシュンに説明を補足する。

「ほら、シュン君も攻撃されたでしょ？　あのゴブリンを使う宿主」

「なるほど、あいつか」

シュンの脳裏に先日の苦い出来事が再度よみがえる。ゴブリン、サイクロプス。それら伝説上の生物を実際に現実に出現させ、カズを奪い去った宿主。その記憶は未だに苦々しい感情を思い起こさせる。

「……確かに、俺はあいつ――絵師だったか――の姿も、能力の詳細も把握できていない。聞かれたところで、ろくな情報は持ってないな」

「私の方でも目撃情報はあるんだけど、正体がつかめないんだよね。何人かやられてるからそろそろ潰しておきたいんだけど」

「まだ情報が圧倒的に足りない。双方で情報収集する必要があるだろうな。それに――」

シュンはふと言葉を切り、公園の中を寄り添って歩いて行くカップルたちを目で追う。――もしも『あれ』がなければ、自分も彼女とあのような幸福の中にいたのだろうか？

ふと浮かんだ雑念を軽く頭を振って振り払う。所詮、それは望むべくもない幻想に過ぎない。少なくとも、現時点では。

突然言葉を切った自分に不思議そうな視線を向ける少女に気付き、

シュンは言いかけていた言葉を続けた。
「――『絵師』だけじゃなく、相手になっている組織の正体すらつかめていない。俺たちのような小さな組織でないことは確かだろうがな……」
それだけのことを言い終わると、シュンは息を吐き立ち上がった。軽く体を伸ばし、少女に向き直る。
「今日はここまでにしよう。そっちに被害が出てるならさっさと決着をつける必要がある。友好関係にある以上、双方で情報収集に向かうべきだろうしな。その方も効率がいい」
肩をすくめるシュンに対し、少女は口元に手を当て柔らかく微笑んだ。
「そんなに淡白だから女の子と仲良く出来ないんだよ？」
「はいはい、分かったよ。じゃあ、また今度な。ハク、で良いんだろ？　今まで通り」
「うん。じゃあね」
軽く手を上げ去っていくシュンの背中に手を振り、見送る。
シュンの去った数分後、どこかで破裂音が響いた。それを期に徐々に公園内を巡回していた人影は減っていく。
「ふふっ、シュン君全然変わってないんだね――よかった」
ハクと呼ばれた少女は減っていく人通りの中で変わらず演奏を続けるリョウの演奏を聴きながら微笑し、公園を後にした。

人取りの半減した公園の中で、リョウの演奏する旋律が大きく木霊した。

▼

スーツ姿の会社員が造り出す雑踏の中を、周囲とは明らかに浮いた眼帯が歩みを進めていた。彼の生み出す空気の問題なのか、その周囲一m以内には誰一人近寄ろうとはしない。街中を歩く獣を警戒して危険から身を遠ざける。そんな本能的な動きが、彼を避ける人々にはあった。

とは言え、当の本人にはそんな些細なことを気にするような繊細な精神は持ち合わせていない。自然と避けてくれる人々の動きに感謝しながらマイペースに歩みを進めていく。

六本木の高層ビル群を縫うように進みながら、目的の場所へと向かう。普段なら兄姉の二人でこと足りるのだが、今回のように手掛かりの少ない場合は彼らには少々荷が重い。

文化の中心地であることを誇るような次世代の建築物の谷間で、肩身が狭そうに佇む一軒の本屋の前で、シュンは足を止めた。

土地開発の際に買い取られなかったことが不思議な程にすすやヒビに覆われた壁面、誰一人立ち寄ることのない建物の内部は暗く、荒んだ雰囲気をより一層濃いものとしていた。

そこにはなにも存在しないとでも言いたげな態度で通り過ぎていく人々をよそに、シュンは引き戸を開け、躊躇いなく店内へと足を踏み入れた。

左右に並ぶ本棚にはろくに分類されずに本が並べられている。長年にわたり堆積した埃は、その中に収められた知識に対する一種の冒涜のようにも感じられた。

大した広さもない店内は数mでレジにたどり着ける。が、レジにも本棚同様埃が積もっており、少なくとも半年は使うどころか触れられてすらいないだろうことが窺えた。

シュンは断りもなく無人のレジを回り込み、その裏にあるドアを押しあけた。
ドアを開いた先、そこには唐突に地下へと続く階段があった。通常思い浮かべるような通路や、休憩室は存在せず、ただ地下に続く階段だけがあった。しかしそこだけは、足元を照らす程度に蛍光灯が取り付けられており、使用された形跡がある。シュンは後ろ手にドアを閉めると、一段ずつ確かめるような足取りで徐々に高度を下げていった。
目線の高さにまで上がってきた扉を開こうとドアノブを捻りながら押しこむ。
詰まった。
わずか数ミリ動かしただけで扉は何かにつかえ、止まった。多少強く押そうと大した変化はない。

「あのデブ……またこもってやがるな……」

苦々しげに呟き、シュンは開けかけた木製の扉を強くノックする。鈍い音が狭い階段に反響し、むなしく虚空に溶けていった。もう一度繰り返すが奥の部屋から返答はない。
半ば予想はしていたものの毎度腕力に頼るのはいかがなものか、などと思いつつも実際に躊躇うのはコンマ数秒程度。今しがた下りたばかりの階段を一段上り、扉に背を向ける。その姿勢のまま右足を曲げ――。
振り向きざまに放たれた蹴りは上部の蝶つがい付近に直撃し、扉は派手な音を立てながら吹き飛んだ。
砕け散ったドアの破片や壁の漆喰が遅れて地面に落ちる。それらの残骸を踏みつけ、先ほどまでは扉だった木の板を乗り越えて部屋へ侵入する。
その部屋で最初に目につくのはコード、そしてサーバー。ついさっきまで扉がつかえていたのも、どうやらこのコードらしい。床一

面足の踏み場がないほどに張り巡らされたケーブルをできる限り踏まないように足を下ろし、部屋の奥に進む。左右でサーバーのあげる唸りはその大きさも相まって、薄暗い中では獣の威嚇のように、侵入者に対する警告に感じられる。

サーバーとコードで形作られた通路を抜け、その先で光を発する物体に向かって歩みを進める。

一人称視点で銃を構える姿が映し出されるディスプレイの前で、シュンの目標は無防備に背中をさらしていた。扉が破壊されたことに気づいていないのか無視しているのか、その巨大な背中は微動だにしない。

脂肪の塊のようなその体へと距離を詰めていくにしたがって、ヘッドホンから漏れる音楽が聞こえ始める。この音量では付近で爆発でもない限り外界へ意識が割かれることはないだろう。

シュンは十分に近寄ると、ヘッドホンを頭から勢いよく引き抜いた。

「ひゃあぁぁあ！？」

奇妙に甲高い悲鳴を上げながら体を硬直させ、重量感のある音と共に椅子から落下した。

「何やってんだ、お前」

呻きながら腰のあたりを押さえる巨体に対し、シュンはあきれたようにため息をついた。

「まあいい。それより、お前またこもってやがったな？　せめて週一で外に出ろって言ってんだろ、賢吾」

「あいててて……良いじゃんかよ別に」

拗ねたような声で応えながら、賢吾と呼ばれた青年はその外見に見合ったのっそりとした動きで立ち上がった。その動作に連動して全身にまんべんなく蓄えられた脂肪がゆさり、と揺れる。
賢吾は巨体を揺らしながら椅子を引き寄せ、勢いよく腰を下ろした。それにつれて椅子のスプリングが悲痛な叫びを上げた。

「で？　なんだよ？　まさかドアを壊しに来たんじゃないんだろ？」

賢吾はちらりと入口に視線を向け、わざとらしく顔をしかめた後、シュンに向き直った。
渋面を作る賢吾を無視し、シュンはポケットから取り出した物を彼の膝の上に放り投げた。それは賢吾のふとももの上で一度はね、小さな音をたてた。
シュンの投げた物を見た途端、賢吾の顔色が目に見えて変化した。褐色の瓶。表面にはラベルが貼られ、色のついたガラス面から僅かに見える内部は小さな錠剤と思しき円形の粒が見えている。そして、そのラベルに書かれている文字、『整腸剤』。
はたから見れば何のことはない、ただの薬の受け渡しであったかもしれない。だが、それは彼らの、いや賢吾に対しては特別な意味を持つ合図。

「……何を調べればいいんだ？」

次に彼が声を発した時、それまで駄々をこねる子供のようだったその目が、鋭利な刃物を思わせる光をたたえていた。

１４　裏（後書き）

今回は遅れ方が異常でしたね。申し訳ありません。テスト期間挟んでたんでそれも一因ではあるんですが……本当に申し訳ない。

それと一応高校三年なんですが、付属校なんで特に受験で書くことを止める、なんて時期はありません。その点、ご安心を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1184v/

メメント・モリ

2011年12月1日20時48分発行